

# Pさんがプロデューサー をするSS

あるふあいあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

キャラ崩壊注意です

メタなことと勢いだけのSSなのでシリアスや甘々新婚生活を期待しないでください  
い

サブタイトルのキャラクターがメインになるとは限りません

良い評価してもらえると、書いている人の承認欲求が満たされ

アドレナリンが大量に分泌されアヘリます

悪い評価してもらえると、凹みます

今更ですが題名を変えました  
誤字修正ありがとうございます

# 目次

## P 未婚編

島村卯月「Pさん！何ですかこれ!!」

1

渋谷凜「プロデューサー？聞いている？」

7

## P 結婚生活編

前川みく「最近、周りの人たちが変な気がするにや……りーなちゃんを除く」

13

本田未央「Pの結婚報告で事務所の空気がヤバイ」

20

多田李衣菜「学生組我らが部所存続会

## 議 in 居酒屋」

33

P「最近気になることがある」

42

佐久間まゆ「私の妹分達が奥手すぎる」

49

ちひろ「休日の過ごし方」

56

橘ありす「最近V Rが流行ってます、V

Rやってみたいです」

63

P「やらかした」

76

昔話勇者仁奈の冒険

81

ちひろ「親に挨拶ですか？」

87

神崎蘭子「こんなこと、許されるはずが

ないわ」

92

- ちひろ「抜き打ちPさんクイズ、優勝者には豪華景品が送られます」—— 96
- P「誰だ!!休憩室にこたつ置いたやつ!!」—— 107
- 単発ホラー
- 三村かな子「346プロ内チョコレト禁止令」【閲覧注意】—— 114
- リードプロデューサー編
- 設定固めるために書き起こして置いたもの—— 128
- P「バレンタインに常務と人材補充の話をしたら仕事が振られた」—— 136
- 幽霊「小梅ちゃん会いに行った友達が全員帰らぬ霊となった」—— 146
- 白坂小梅「……………」ホラー映画上映会……………楽しみ……………」ニッコリ 153
- P「デスクワークが増えたら前より忙しくなってる気がする」—— 159
- 及川雫「グラビア課から転属しました」—— 176
- 城ヶ崎美嘉「少し、お話を伺いたい」 187
- ちひろ「休みですよ!」—— 198
- P「頭が痛い?」—— 206
- 隣P「撮影場所が取れなかった?」



## P 未婚編

島村卯月「Pさん!何ですかこれ!!」

事務所

P「な、なんだ、卯月、いつものスマイルはどうした」

卯月「どうしたもこうしたもありません、このMVを見てください!」

MV視聴中

P「何の変哲もないMVだったな」

卯月「違いますよ、よく見てください!胸が揺れてるでしょ!」

P「そりや大きけりや揺れるだろう」

卯月「じやあ次にこのMV見てください」

MV視聴中

P「やはりS (mile) INGは良い曲だな」

卯月「あぁーもう、ちゃんと見てましたか?」

P「しまむーの笑顔満点だったじゃないか」

卯月「ぜんっぜん見てませんねえ、アイドルとしての私の売りってなんだと思っ

す？」

P 「そりゃあ、笑顔でしょう」

卯月 「ぜんっぜん分かってませんねえ、とある企画でSNSで私よ魅力が何なのか投票があつたんですよ！それでファンに一番の魅力って言われたのお尻ですよお尻！」

P 「それは、実際でかいしな」

卯月 「私はどうせ尻村卯ケツですよ！ただ許せないのはこのMV達全部胸揺れあるのに私の魅力的なお尻を取り上げてくれるの一つもないんですよ！」

P 「まで、YES！PartyTime!!ではお尻フリフリしてただらう！」

卯月 「スカートじゃ私のお尻の魅力は全部出しきれないんですよ！みくちゃんの猫耳ボンテージの方がよっぽどお尻がフリフリして可愛かったよ！あの子私より胸大きくてお尻も私より目立つとか……………と云うかあの子まだ15よね……………もしかして……………年下の子にプロポーズン負ける……………？」

P 「よく分かったな、実際負けてるぞ、そのお尻以外」

卯月 「なーーーーー!!おかしいでしょ!!私アニメ主人公やってたのに、乳牛なんか体オリジナルモデルなのに私は汎用モデルですよ！」

P 「そりゃあ巨乳と貧乳はオリジナルモデルだろう、かつて如月千早がフィギュア化するのにオリジナルの体のモデルが作られたように胸の大小はそれだけで個性、魅力だ



からな」

卯月「それならお尻の大きい人のオリジナルモデルあっても良いでしょう!」

P「それもそうだけど、胸はわかりやすいけど尻って分かりづらくないか?」

卯月「それもそうですよ!何ですかあのフリフリばかりの服!どの衣装も私の魅力的なパーティータイムゴールドは下半身モデル多分使い回しじゃないですか!ニュージエネの中での個性が顔と胸が中途半端なだけですよ!」

P「いやいや、俺に言われてもそれは変えられないでしょ」

卯月「おかしいよお、さらさらヘヤーと貧乳枠は凜ちゃん、快活なイメージとバストサイズの未央ちゃん、笑顔とお尻の私のはずなのにおかしいよお」

P「うつとおしいから縫り付くすがりつくな」

卯月「このままで私の個性があ、笑顔以外にあつた私の個性があ、才能があ」

未央「いやあ、話は聞きましたよしまむー」

卯月「ニュージエネ巨乳枠の未央ちゃん!」

未央「私もこれで気になることあるですよ」

卯月「何ですかねえ巨乳枠なのに並乳扱いの未央ちゃん」

未央「それだよ!P!これ見て」

MV視聴中

P 「加蓮の胸って大きかったんだな……」

未央 「それだよ！私のプロポーションかなり自身あつたのになんでえ！なんで私胸並なの！」

卯月 「やっぱりおかしいですよ！このMV！」

未央 「そうだそうだ！」

P 「わかった、未央、お前の不具合はしっかり常務に伝えておこう」

未央 「ほんとに？やったー！！ありがとうねーP！これならレッスンあるんだった！またねー！」ビューン

卯月 「え？え？え？私のは？」

P 「いやあ、お尻のサイズ変えて誰が見るのさ？」

卯月 「私のファンです！」

P 「正直な話お尻でも、かなことかの方が凄いぞ」

卯月 「あああああああ、あんの桃豚がああああああ!!」ドゴオ

P 「どうどう、落ち着け卯月、アイドルがしてはいけない顔してるって、ファンには見せられない顔してるって、聞いてます？プロデューサーさん困ってますよー？」

卯月 「は！わ、私はなんてことを」

P 「よし落ち着いたな」

卯月「ダメですよ私、どうせ努力なんて無駄なんです、どうせみくちゃんと一緒に売れなくなったら身売りするしかないんです」

P「まて、卯月、ナチュラルに前川さんを巻き込むな」

卯月「だってそうでしょ!何ですかあのボンテージ!セクシーみくつて!あの子15でしょ!保護者(多田李衣菜17歳)は何やってるの!」

P「ああ、あれはそういうネタだろうと思って1度着せてみたら思いのほかプロポーションが良くてそのまま企画が通ったんだ」

卯月「私なんてお色気要素スク水とブルマとホットリミットの紐ですよ紐!ネタ要員として使われるのが私っておかしいでしょ!というか最初の二つ小学生ですか!」

P「童顔なのも卯月の魅力だから仕方ない」

卯月「はあ、なんか大声出したらお腹がすきました、ご飯食べに行きましょう」

P「いや、無理そうだ」

卯月「何ですか!」

P「お前の話聞いてたから全然仕事進んでなくて休憩あけのちひろさんがものすごい笑顔でこっち見てるから」

ちひろ「Pさん、ご飯食べに行くなら私も行きますよ、もちろん可愛い”女の子”2人を連れ歩くんですから全部おごりですよね?」

P 「え？ちひろさんって女の子って歳じゃ……………」

ちひろ 「卯月ちゃん、今日はお寿司奢ってくれるってえ」 ゴゴゴゴゴゴ

卯月 「ありがとうございますPさん！」

P 「あっあっあっあっ」

この後メチャクチャ寿司くった

終わり

# 渋谷凛 「プロデューサー?聞いてる?」

Pの家

スマホ「オーネガイーシーンデレラー♪」

P「ん?こんな時間に凛から電話?なんだ?」

凛「もしもしプロデューサー?もしかして寝てた?」

P「スマン、シャワー浴びてて遅れた、どうしたんだ?」

凛「そうなの、ちょっと気になったことがあってね」

P「なんだ?」

凛「前に卯月から聞いたんだけど、私もその、売り方?というかファンのイメージ?みたいなものに気になることがあって、とりあえず、その、私のす、スリーサイズってわかる?」

P「上から80・56・81」

凛「さらつと出てくるところが怖いよ」

P「仕事だし、この間のことで気になるから全部調べて頭に叩き込んだ」

凛「なら話が早いんだけど、私のバストサイズって大きい訳では無いけどぺったん

こつて訳ではないと思うのよ」

P 「まあ、80切ってるわけでもないし、まだまだ成長期ではあるからな、これから大きくなるかもしれない」

凛 「じゃあさ、バストサイズ80の人上げていつて」

P 「うちの所にいるのは、城ヶ崎姉、多田李衣菜、日野茜、姫川友紀、アナスタシアとかだな、上下1cmなら高垣楓や和久井留美、緒方智絵里、南条光なんかがいるな」

凛 「なんかさ、私、アイマスのロングヘア担当というかさ、クール担当というのでさ、勝手にべったんこ扱いされてることあるんだけどさ、私、人並みにはあると思うのよ」

P 「まあ、15歳の平均って確か80ちよいくらいだからな、そんなもんだらう」

凛 「その中でもものすごく気になることがあるの」

P 「どうしたんだ」

凛 「ユツキーさんいるじゃん？」

P 「おう、キャカス酒樽女がどうした？」

凛 「なんか、毒あるね… まあそのユツキーのイメージに貧乳ってないよね、むしろ胸が大きいイメージない？」

P 「あー、なんかわかる気がする」

凛 「ではここでp i o i vで調べてみよう」

P 「急にどうした?」

凛 「まず渋谷凛タグからね、まあ、いつもの私の制服で胸も控えめだね、ニュージエネのイラストでも他の2人より控えめになってる... ここまでは分かるわ」

P 「おう、そうだな」

凛 「次に姫川友紀タグ... 巨乳、ロリ、巨乳巨乳、1つ貧乳挟んでまた巨乳... ふっざけんなああああああ!!」 バーン!!

P 「いつ、耳元で叫ぶな叫ぶな!」

凛 「おかしくない? バストサイズ同じだよな? デレステのMVでも巨乳じゃないこと分かるじゃない?」

P 「まあ、俺がああのアア衣装見た時の第一印象ドラム缶だったしなあ」

凛 「そうなんだよプロデューサー!! ああのアア樽女なんで巨乳扱いされてるの? むしろ私の方がウエストとヒップ勝ってるのに何だよオ」

P 「いや、そこはファンのイラストなんだから、俺の力ではなんともできないよ」

凛 「今度、ニュージエネでもTPでも1人いいから、KBYDと一緒に水着の仕事持つて来なさい、ファンに私のスタイルの良さを見せつけるわ」

P 「お、おう、わかった」

凛 「よろしく、お願いね、それにしても少し意外だったんだけど、なんでユツキーさ

んに対して大分毒ある発言多いの？」

P「…………… 飯食ってないよな…………… 仕事終わりに野球が見れる居酒屋で飲んだくれるビア樽女を見つけてな、帰りの車で一回ナイアガラやらかして…………… その後スーツにセカンドインパクトやりおった……………」

凜「あつ…（察し）」

プロデューサー！ネーハンガードコニアルノー？

P「あ、ちよつと待つて」クローゼットニアマツテルヤツツカッテー

凜「……………」

P「戻った」

凜「…………… ねえプロデューサー、今の誰？」

P「件のビア樽女だが」

凜「…………… なんでユツキーさんがプロデューサーの家にいるの？」

P「この時間だとクリーニングできないから家で洗わせる」

凜「…………… ちよつと待つておかしくない？」

P「え？」

凜「え？」

P「え？」



凛「え? ユッキーさんよくプロデューサーの家に来たりしてるの?」

P「まあ最初の頃は流石にスーツ汚しても経費から落としてもらえてたけど、流石に回数がかさむとちひろさんが困り始めてしまつてね、スーツ汚した本人に弁償させるか洗わせるか話になってそれで洗いに来ることは多々ある」

凛「なるほど……なるほど?」

P「流石に大人だしな、これぐらいやらせないと下の子たちに示しがつかん、城ヶ崎妹は前は汚れた手で突つ込んでくることあったけど姉が毎回何かしらお詫びの品を買ってきたからな……今考えると悪いことしたなつて思う」

凛「もう、終電終わるかもしれない時間だけど大丈夫なの?」

P「だいじよばないな、だがやらせるぞ」

凛「え?」

P「徹夜でもやらせる、もちろん明日のレッスンはそのままやらせるがな、仕事帰りに居酒屋による気すら起きないほどシゴいて貰えるようにトレーナーさんに連絡してある」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

凛「あーうん、ご愁傷様だね……ちなみに他の人も泊まることあるの?」

P「最初に始めたのがちひろさんがビールこぼした時かな、その後、ビア樽女がやり方わからないつて言うからその場にいた菜々さんが教えるために泊まってくれたかな、

今は換えのストックがあるからやらなくても良いんだけど、反省させるためにやらせてる」

凜「……………なんか、うん、よかった」(変なことになってないのね、よかった)

P「よかないよ、こんな夜に転がり込みやがって、凜、お前はこのような事にならないようにしろよ」

凜「うん、お疲れ様、おやすみなさい」ピッ

凜「……………」(私もスーツの洗い方覚えてPの家に行ってみようかな)

次の日 事務所にて

P「ゴルア姫川ア何寝てんだ仕事行くぞオ！」

友紀「待って、死ぬ、死んじやうから、いつもの3倍のレッスンやってそのまま仕事に行ったら死んじやうから待って、許してプロデューサー!!」

P「何言ってるんだ行くぞ」グイグイ

友紀「助けてちひろさーんしぶりーん」ズルズルズルズル

ちひろ「気をつけて行ってらっしゃい」ヒラヒラ

凜「……………行ってらっしゃい……………」(やっぱりやめよう) ヒラヒラ

## P 結婚生活編

前川みく「最近、周りの人たちが変な気がするにや……  
りーなちゃんは除く」

李衣菜「えー？ そんなに変わったかなあ？」

みく「まあ、りーなちゃん馬鹿だから気がついてないだけだと思うにや」

李衣菜「私が馬鹿か？ ありがとう！ ロックに馬鹿は褒め言葉さ！」

みく「(馬鹿でよかった) 例えばあそこで事務所の掃除をしているりんちゃん」

李衣菜「うんうん」

みく「最近、菜々さんに家事のこと教わってるみたいですよ…… 主に洗濯と掃除なんだとか……」

李衣菜「それは、一人暮らししたいんじゃない？ 実家勢だから寮組と違ってさ、そういうの憧れるじゃん」

みく「まあ、そこはわかるにや、それより変わったのは…… まずこのポスター見て」

李衣菜「卯月ちゃんのフィギュアのポスターだね、T. M. Revolutionの

ホットリミットとのコラボだね！ロックだよ！こういうのは私に振ってくれてもよかったですね！ロックだし！」

みく「（…：… 馬鹿だにや）おかしいよね、卯月ちゃんなんでこういう路線に行っちゃったの…：… キュートの10代セクシー路線みくと被っちゃったにや」

李衣菜「え？セクシー路線だったの？てつきりバラエティで脱がされるアイドル枠だと…：…」

みく「は？」ミシミシミシ

李衣菜「痛い痛い痛いギブギブ」バンバンバン

みく「みくはセクシーキャット路線にや」

李衣菜「そう言えば変わったで思い出したんだけど、ユツキさんいるじゃん」

みく「ああ、よくPちゃんとよくいるよね」

李衣菜「この間会ったんだけどめっちゃ家庭的になってた」

みく「うーん、全然思い浮かばない」

李衣菜「私もびつくりした、事務所でビール飲む人のイメージだったからさ、事務所で会議があった時とか給湯室でちひろさんの手伝いしてたし小学生組が使ったコップとか残って洗ってた…：… 私のも洗ってもらった」

みく「何かの罰ゲームかやあ、ってなにパシってるにや」

李衣菜「いや、自分のは自分で洗おうとしたらまとめやるから置いていてって言われてそのままって感じだった」

みく「やっぱりみんな変わったにやあ」

P「ただいまー」

みく「おかえりなさいにやー」

李衣菜「おかえりー」

P「ちひろさんいる？」

みく「コンビニいつてくるて出てったよ、私達はお留守番にやー」

P「そうか、じゃ待つてりやいいか、もうレッスンもないもんな仕事ない人は上がっ

てもいいよー」

アイドル達「はーい」

凜「プロデュース」

李衣菜「プロデューサー！気になることがあるんだけど」

P「おう、なんでもこい」

凜「……」ビキビキビキ

みく「(りーなちゃんはやっぱり凄いにや)」

李衣菜「最近ユツキさんめっちゃ事務所の家事の手伝いやつてるの見るんだけどなに

かの罰ゲーム？」

P 「あれか、あれは罰ゲームというか自主的というか、あまりにもだらしな過ぎて常務に怒られて最初は半ば強制的にやってるらしい」

李衣菜 「私生活がだらしなくて怒られるって相当ロックなんだな！」

P 「まあ、な、色々あつたんだよ、その後KBYDの二人や小学生アイドルの面倒を見始めてからなんか母性本能が湧き始めて続けてるらしいけど…… 大人アイドルの飲み会で、川島さんが野球選手と結婚した元同僚はみんな家庭的だったって吹き込んだらしい…… ちひろさんの機嫌がよくて助かってはいるんだけどね」

李衣菜 「なるほど、なんかスツキリした」

P 「私生活しつかりしとけよ、本当に、俺も一緒に怒られるから」

李衣菜 「わかったー、じゃ、お先失礼しまーす」

凜 「よしー」プロd

友紀 「おーい！プロデューサー！今日飲みながら野球見たいからいつものお店いこーよー！早苗さんも来るって！」ダキツキー

P 「近い近い、このあとちひろさんと話があるから先に行くか待ってるなら事務所のテレビで見てるー」

凜 「(？) (▽、) 」

みく「(凜ちゃんめっちゃ怒ってますやん、Pちゃん気がついてー)」

友紀「(・? ?)ニヤリ

みく「(こ、これは、計算通り、もしかしてユツキさんもP狙い?)」

凜「(●●)言(●●)」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

みく「(凜ちゃんめっちゃキレてるやん、怖い怖い怖い、アイドルがしていい顔してないよ大丈夫?、というか李衣菜が帰るタイミングで部屋を出ればよかった、早く帰ってきてちひろさん!)」

友紀「そう言えばプロデューサー! わたしが! 作ったお弁当どうだった?」ニヤ(▽・)ニヤ

みく「(あ、違う、これいつもの畜生なユツキさんが日頃の抑圧から解放されただけだ、気がつけ凜ちゃんこれは煽られてるだけって)」

凜「(??) ? ?? ▽ ?? ? ??)」

みく「(えー、めっちゃキレてますやん、いつもなら、『ふーん、あつそ』で済ますクールな凜ちゃんがめっちゃキレてますやん、激おこプリン丸ドリームムカ着火ファイヤーだよ、そんな感じの顔だよ) ストップ凜ちゃん」小声

凜「みくちゃんどいてそいつころせない」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

みく「ユツキさんも、煽らないでー」

友紀「あ、バレてた？ごつめーん！という訳であんまり遅くまでは居られないけど野球居酒屋二人も一緒にどう？、ソフトドリンクあるし夕飯もでるよ、もちろん肉もあるから心配しないで！いいよねプロデューサー！」

P「まあ、いいだろ、後でちひろさんも誘うか、どうだ二人とも」

凛「行く」

みく「うーん、行くにや、りーなちゃんも誘つていい？」

友紀「いいよー！宴会はみんなでパーティーとやらないとね！」

P「そうだな、そんな宴会で飲み過ぎてやらかさないように飲み放題無しな」

友紀「そんなー、そりゃないよプロデューサー」

みく「（このあとめちやくちや食って飲んだ）」

その頃のPの家 Pのベッドの上

まゆ「（まだかなあPさん……）」

その後、予想外の飲み会によりその日のPの帰りが0時を周り、泥酔状態の友紀がスーツにナイアガラをやらかしてまた洗うことに、介抱するために着いてきた早苗さんにPのベッドで寝ているところを発見され、現行犯で早苗さんからめちやくちや怒られた。友紀は禁酒された。

まゆ「こんなはずでは……」正座中



早苗「もうあなたは、何度言ったらわかるの！ピッキングして家に入るのは立派な犯罪です！今日という今日は許しません！」

まゆ「ごめんなさい」 土下座

## 本田未央「Pの結婚報告で事務所の空気がヤバイ」

## 事務所

凜「佐久間さん、もうPの部屋に忍び込むのやめなよ、Pが心臓に悪いからやめて欲しいし、寮長が心配するって言ってたよ」

まゆ「あらあら、渋谷さん、あなたも犬みたいにPのスーツの匂い嗅ぐの辞めたらどうでしょう、嗅ぐ時にシワが残るからやめて欲しいとボヤいてましたよ」

未央「いやいや、どっちも病気だよ、せっかく未央ちゃんアイス買ってきたのに、二人仲良く食べるようにパピコ買ってきたのに二人して私の雪見だいふく仲良く1個ずつ分けて食べるぐらいには仲いいのになんでこんなにも険悪なムードになるの？おかしくない？さっきまでニコニコしながら雪見だいふくお互いにあーんしてたんだよ？おかしくない？あつなんだろうこれ、パピコの二本同時食べやばい優越感というか禁忌に触れてる感じ気持ちいい今度また家でやる」

ちひろ「あ！皆さん、これから美城常務が事務所に来るそうだから失礼の無いようにと連絡がありました」

3人「はい」

ちひろ「3人とも今日はもう予定はありませんね、美城常務の挨拶が終わったら帰って良いですよー」

3人「わかりましたー」

P「ただいま戻りましたー」

卯月「おつかれさまでーす」

ちひろ「おかえりなさいPさん、子供組は？」

P「送ってきました、時間も時間ですし、今日は常務も来るのでかしこまったのは難しいでしょう、ていうか俺が帰りたい」

ちひろ「もう、そんなこと言って、しっかりして」

P「うう…… 頑張る」

3人（なんだろう、最近二人の距離がすっごい近い気がする）

凜「……」ギリイ（え？もしかして本当のライバルはちひろさん？大人だし、しっかりしてるし、少し子どもっぽいPにはお似合いかも、嫌ダメだPの隣には私よ！負けない、私には誰にも負けない愛と付き合いの長さがあるわ、なんてったってアイドルと事務職よ、誰だってアイドルを選ぶわ、そう、大丈夫、初期アイドル私じゃない、付き合い長いのも私じゃない！）

未央（って考えてるんだろなあ、どう考えても担当任される前から一緒に働いてる

ちひろさんの方が長いよね？さて、問題のマジもののヤンデレさんは)

まゆ「うふふふふふ」

未央(やつべえー、目がすわるってこういうの言うのか、初めてリアルで見た、あれか、ネットでみた何とか目って奴か、目に光がない奴、いや、まゆさん、いつもそう言う感じだけどさ、今回はとてもまともな人間のものとは思えない黒さだよ、Pさん、担当アイドルの暗黒面に気がついてー、というかこの重苦しい空気に気がついて、私パピコ食ベきつたのに容器を吸い続ける作業しか出来ないよーなんで3人掛けソファアの真ん中陣取っちゃったかなー、私がいつちばーんって言ったからか、私のせいだ、辛い)卯月「あ、みなさんもアイス食べたんですね、えへへー私も買ってきちゃいました。」

凜「お疲れ、卯月」

まゆ「お疲れ様です、卯月さん」

未央「おつかれー!!」

未央(ありがとう卯月エル、天使は存在した！助けて私をこの空気から助け出して)卯月「……」。ハッ！

未央(よし、気がついた、私をたすけてー)

卯月「カップアイスなのにスプーン忘れてしまいました、取ってきまね」

未央「ドジっ子だなー、しまむーは」(ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア)

「ア、ア、ア、ア、ア」

|| 大人達 ||

美城常務「やあ、みんな、お疲れ」

6人「お疲れ様です」

未央（よつしやきた救世主、あ、パピ容器隠さないと怒られるあぶね！）

美城常務「アイドル達は寛いでいるところ悪いな」

P「あのー、常務、アレですか、誰かまたやらかしましたか？」

美城常務「ああ、それに関しては問題児を君に押し付けている節はあるから、まあ、仕方ないところはある」

4人（私たちって問題児だったんだ……）

美城常務「いや、今日はそのことで来たわけではない、P、結婚祝いだ、受け取りたまえ」

P「え？ああああ、ありがとうございます」

|| アイドル達 ||

未央（その時、空気が、凍った、今現在のこの場のみんなの反応を見てみよう、まずしぶりん、これは思考がまとまってない顔ですね、あとが怖いけど保留、次しまむー、驚いてるけど、普通に祝福する感じですね、いいよ、やつぱりしまむーは天使だ、最後に

まゆさん…… あれ？すつこい驚いてる、え？まさか、まゆさんでもなければ、まゆさんが気が付かない人？マジ？え？怖いんだけど)

凜「……………」ギリイ

未央(あ、しぶりん思考がまとまって、まゆさんの方見た)

まゆ「………… ハッ…………」ブンブンブンッ(・皿・、；)

未央(まゆさん必死の否定)

凜「……………」(；；皿)エ……

未央(やっぱりまゆさんが知らないのに驚くよね)

|| 大人達 ||

美城常務「はあ、私も親から結婚しろと言われてるのだがね、君の話を聞いた時、びっくりしたよ」

P「ま、まあ、冗談みたいな話ですからね」

美城常務「はあ、君らの映画のような口マンズは羨ましい限りだよ」

|| アイドル達 ||

凜「集合」(小声)

卯月「おめでたいですわね！」

まゆ「大変なことになりましたわあ」

未央「全然そんな様子無かったよね」

卯月「なんで？皆さんそんな怖い顔してるんですか？」

凜「よくよく考えてみなさい卯月、Pがもしかしたら子供が生まれたことをきつかけに辞めるかもしれないのよ」

まゆ「まあ、この業界、水物ですし、子供が産まれたら安定した部所への移動や転職もありえるかも知れませんか」

凜「さつき常務が言ってた通りこの部所はアイドル部門でも問題児のたまり場よ、固すぎる小学生アイドル、ありすちゃん。才能溢れすぎてストッパーが姉しくない、莉嘉ちゃん。可愛い連呼する中学生、いつもナイアガラしてる大人、鬼畜和菓子のKBYDの3人。ADを絞め落としたことのある、早苗さん。電波地下アイドル系、菜々さん。いつも喧嘩してる、\*の2人、Pに一目惚れして勝手に入り浸りなし崩しでモデルから転属したまゆさん、そして、いつもだべってる私らニュージエネ……正直後任が来るとは思えないわ」

卯月「それは困ります！」

未央「シッ、しまむー、ボリューム抑えて」

まゆ「何よりも不思議なのは結婚しているにも関わらず誰一人寿退社してる人が出てないことですわあ」

凜「そうだね、Pはほぼ仕事終わりは毎週ゆつきーさんの飲みに早苗さんや菜々さんと付き合ったり、私らの相手してるからアイドルの誰かしらだと思っただけど、もしかしてちひろさん？、いや、無いわね、事務所にいる時は大体他のアイドルがいたりするし、飲み会なんかは大人の誰かが誘わない限り来ないって前に菜々さんが言ってたもの、この前はありすちゃんと莉嘉ちゃん連れて遊園地行つてたわね」

4人（……あれ？……Pさんいつ休んでるんだ？）

卯月「今考えてみると大体アイドルの世話というか面倒を見てるんですね……今度小さい子達の面倒は私たちで見ましよう」

凜「……そうね、退職前に殉職しそうよね」

まゆ「Pさんを支えるのは私ですわあ」

|| 大人達 ||

ちひろ「お茶とお菓子です」

美城常務「うむ、ありがとう、しかしそろそろ行かなくては、」

ちひろ「そうなんですか？」

美城常務「うむ、産休は取れるように手配するから出来れば早めにいつてくれ、『二人とも』お幸せにな、ではな、式の日程が決まったら連絡してくれ」

2人「分かりました、ありがとうございます」



ちひろ「あ、みなさんは上がっていいわよー」

Ⅱアイドル達Ⅱ

凜まゆ「は？」

未央（え？ヤバイヤバイ怖い、こつちから黒いオーラと殺気がちひろさんに向けて飛ばされてるの！いつも通りニコニコしてるちひろさんヤバイって、）

卯月「Pさんとちひろさん、いつの間にそんな関係に!？」

未央（しまむー！突っ込んだー！地雷原に核ミサイル落としやがった、でもごめんね、いつもはその役回り私なんだけど今回私無理、なんで二人とも腕に手を回してがっしりホールドしてるの？逃げたいんだけど帰りたいんだけどー）

ちひろ「実はPさんと初めてあったのは二人が中学生1年生の時になんですよー」

卯月「えええ！そうだったんですか？そうするともう、10年以上お付き合いしてたんですか!？」

P「ああ、んん、まあ、ちよつと違うけど、中学1年の時に同じクラスでそこから子の職場で偶然再開するまで何も音沙汰無かったからまともに話すのは仕事始めてからかなあ」

卯月「映画みたいなロマンスが気になります!」

ちひろ「実は、中学1年のとき私もPさんも進学校で電車通学だったんですよ、帰宅

部だし、帰る方向が同じなだけで、クラスでも通学路でも顔を合わせるだけで」

凜「あー、なんかわかるかも」

P「その日は体育祭練習があった日の帰り、たまたま席が二人並んで空いてて二人とも疲れてたから並んで座ったわけよ」

未央「もしかしてそこでラブロマンスが？」

P「いやそのときはそんなことも無く何も喋らずに二人とも爆睡した」

まゆ「…………… あっ、もしかして乗り過ぎました？」

ちひろ「まあ、二人揃って乗り過ぎました、二人とも知らない場所まで来てしまつて帰り方も電車しかわからず、その電車も次は2時間後、暇だから駅のベンチで話をしたんですよ」

P「なんでかは忘れたけど結婚の話になつてなー、二人とも実感ないし、2X歳になつて、独り身だったら結婚してやるよ！って言ったら」

未央「あ！最近ちひろさんの誕生日だった？」

ちひろ「そうですね」

P「まあ、いつもみたいに飲み会にしようとしたらゆっくり飲みたいと言っていたからみんなに黙って予約して黙って二人で行ったんだ、そこで二人とも思い出して、次の日役所行った」

未央「はやっ！」

P「お互いに危機感があったからなあ、きつかけがないと結婚出来ないし、まあ、安心しろよ、産休育休とつても担当は辞めないから」

卯月「よかったあ！私たちアイドル続けられるんですね！」

まゆ「……………ちひろさん……………私をこどもください！」(@|@)

未央「ちよつちよつちよ、まゆさーん、日本語変ですよー！」

まゆ「あつ、間違えました！ちひろさん、私を産んでください！」

ちひろ「……………は、はあ」

未央「ストップまゆさん、戻ってきて、Pさんいるから、見てるから。」

凜「……………ギロリ」

ちひろ「……………」ニコツ

未央「やめよう、しぶりん、付き合いの長さとかもう負けてるし、完全に大敗だよ」

P「お前から元気だなあ、とりあえず、明日もレッスンあるから早く帰れ帰れー」

凜「待つてプロデューサー納得いかな 未央「さあさあ、あとは若い二人に任せまして私らは帰りますよしぶりん、しまむーも手伝って！」卯月「はい！」

まゆ「お幸せにー」ノシ

P 「おまえら、出てきていいぞ」

みく 「Pちゃんいつの間に入籍してたのかにや？」

李衣菜 「みんなに思い立ったら即行動ってロックだよね！」

P 「お前らいい加減に美城常務に慣れろよな」

みく 「そんなことより驚くべきことがあったはずにや」

李衣菜 「……あれ？でもさあ、前に言つてたことと違うくない？確かちひろさんは仕事で初めて会つたつて」

P 「ああ、気がついたか、多分まゆも気がついているだろうな、ぶつちやけると、そのときはお互いに誰だか忘れてた」

李衣菜 「え？」

P 「俺はクラスメイトの名前とか全然覚えてなかったし、二人で話した時も名前とか気にしてなかったから聞いてなかったし」

ちひろ 「私は名前は覚えていたんだけど、Pさん苗字が変わっていたので、気が付きませんでした」

みく 「ああ、何故かした結婚の話!!」

P「そうそう、うちの親か離婚して再婚したのがその頃で暇つぶしに結婚ってどんなもんだろうかって話になったのだよ」

李衣菜「でも何で、このこと話さなかったの？」

P「まあ、凜とまゆには1度失恋してもらわないといけないと思つてな、たまたまそうだったっていうなし崩しな結婚ではなく、自分よりも長く付き合つてた恋敵がいてっていう、本当にどうしようもない失恋をしてもらわないと多分今後アイドルとして辞めともらうことになるだろうからな」

李衣菜「まゆさんは気がついてるんだから意味ないんじゃないの」

P「まゆはもう受け入れてるだろう……… たぶん………」

みく「なんか問題児ばかりなのが納得してきたにや」

P「なんというか、こういう時ユツキーの単純さが欲しくなるなあ」

ちひろ「私達も帰りますよ」

P「そうだな、二人とも今日は寮まで送ってくからちよつと待つてろ、ついでに飯食つて帰るぞ、口止め料だ」

みく「やったー！ハンバーグにや！」

李衣菜「そう来なくっちゃ！私ステーキ！」

ちひろ「では、私はオムライスで」

P 「ああ、もう、全部出すから任せとけ」

このあとめちやくちや洋食食った

多田李衣菜「学生組我らが部所存続会議」 i n 居酒屋」

〓居酒屋〓トイレ

ちひろ「大丈夫ですか？友紀さん」サスサス

友紀「だ、大じよ…… オロロロロロロロロロ」

ちひろ「嗚呼、また、盛大に……」サスサス

友紀「大丈夫だから、だいオロロロロロロロロ」

P「大丈夫かー？とりあえず吐いとけー、体からアルコールを出せ出せ」

友紀「プロロロロロロロロロでゅーさ、オロロロロロロロロ」

P「なんか、お前見てるとなにかに目覚めそうだよまったく」

友紀「うちの事務所のゲロインの座は誰にも渡さない」キリッ

P「その座から早く降りろってんだよ」ゴスッ

友紀「ひうつ、オロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロ」

ちひろ「わざまえ」

友紀「あー、すつきりした!!」

P「もどるぞー」

## || 居酒屋 || 宴席 (大人+小学生卓)

P 「まさか未成年も参加してる昼の忘年会で飲みすぎて吐く馬鹿が出るとは思わなかった、しかも、お酒ほとんどないのに」

早苗 「ここまで来ると最早芸術よね」

ちひろ 「そういえば、話しておくべきことがあるのでは？」

P 「あー、そうだった、忘れるところだった」

へまゆ 「まゆへの愛の告白ですかー？」 ノシ

P 「HHHHHHHH!! そんな訳ねえだろ、今後のうちの方針だよ、常務と話し合つて決めたことだから伝えようと思つてな」

へ卯月 「もしかして、私たち、アイドル辞めろつて言われませんかー？」 ノシ

P 「ここで宣言しておくけど、というか来年の抱負に近いけど、正統派アイドルとして売る気は無い…… \*だけは今後の努力次第でファンの前で歌うアイドルとして売るかも…… まあ、そんなことよりもお前らはアイドルタレントを重きを置いて売り出すつもりだ」

仁奈 「たれんととは何でござえますか？」

P 「アイドルとしてライブや歌番組なんかの出演だけでなく子供番組やバラエティ番組、まあスポーツや料理の方面とかにも出るのが仕事になるな、必然的にライブや歌な



んかの仕事は減る」

仁奈「タレントの気持ちになるですよ」

〈未央「はいはい、プロデューサー、しつともーん、正直今の方針と変わらないと思いまーす」ノシ

P「まあ、そうなるな、ただ、これまでは純粋なアイドルを目指して入ってきた人が多いと思うから、4月までに部署替え考えとけよーって事だな、それはそうと姫川アアア……………」

〓居酒屋〓（学生卓）

李衣菜（とまあ、学生卓と大人組＋小学生卓に別れたのだけれど）モグモグ

まゆ「うふふふ」

凜「……………」ギリギリギリ

李衣菜（ちひろさんとPの結婚祝いも兼ねての宴席だから空気がやばい）カラアゲ  
トツテー

みく「卯月ちゃん、唐揚げとつてにやー」

卯月「あ、はい、これですネーどうぞー」

未央「あ、私もわたしもー」

李衣菜（この席では最年長の一人なんだし私が何とかしてみようかな）レモンカケテ

イイ？

みる「ダメにやー」

李衣菜「よし！」レモン汁プシャー

みる「にやああああああああああ何するにやー!!!」

李衣菜「あつ、ごめん無意識にやってた！」

へP「あああもううるさいぞお前らー好きなの頼んでいいから静かにシロー」

みる「にや？ホントかにや？卯月ちゃんメニユーをとるにや」

卯月「はい、あ、私は生ハムあればお願いします」

みる「わかったにやー、さーてハンバーグはあるかにやー？」

李衣菜（うん、元気そうな人達を置いて失恋した2人に耳を傾けてみよう……）

年下の子の恋愛相談に渋く答えたらロツクだよね！

凜「はあ、早くオトナになりたい……というか、Pと同じ年に生まれたかった……」

まゆ「そうですね、正直同じ年に生まれて、同じクラスに通ったとしても私はちひろさんに勝てる自信ないですよ」

凜「……どうしてですか？……まゆさんが敗北宣言とは珍しい」

まゆ「先日お話聞いたのを……落ちていて考え直したのですけれど、ちひろさんとプロデューサーさんは、ほぼ恋人同然の関係だったと気がついてしまったのです

よ………」

凜「え？」

未央「なにになにー？わたしも気になるー」

卯月「恋愛トークですね！」

まゆ「まず考えてみてください、ちひろさんってプロデューサーさんって事務所で最後まで残ってること多くないですか？」

未央「あ！確かに、最後には『かえっていいぞー』って言って私達は帰らせるよね」

凜「？でも、大人組がいるんじゃない？」

卯月「前に収録で遅くなった時、帰りに送ってもらったんですけど『これから事務所戻らないと』って言ってましたよね」

凜「あー、そういうえば、あの時は大人組は非番や早上がりだったはず」

未央「あつ！もしかしてちひろさんを迎えに行った？」

まゆ「私はプロデューサーさんが1人で帰るところを見たことがありますし、私ที่บ้านで待っている時はほとんど誰かが一緒に家に来ます……そして、その中に毎回ちひろさんもいるんですね……」

幸子「もしかして、既にちひろさんと出来たとかじゃないですか？カワイイボクをさしおいて！」

紗枝「多分、最初からあんたは眼中に無いと思うて」

みく「いいすぎにや！」

まゆ「うふふふ、今日もキレの良いツツコミですネ、それはそうと、自然にあのような関係になれるのは認めたくはないのですが運命というものを感じます……完敗です……しかもその状況に私達は今まで気が付かなかつた、もう当然なものだと認識していたのですよ……」

凜「……私達の相手は難攻不落の一夜城ではなく万里の長城だったわけか……勝てるわけないよ……」

李衣菜（……………）

李衣菜（……………何声かければいいのか、わっかんねー……）

李衣菜「と、とりあえず今日のところは食べて忘れよう!!」

凜「あー、どこかにプロデューサーみたいに頼りがいがあつて包容力のある男の人居ないかなああああ」

李衣菜（重症だー、つていうか聞いてねえなこいつ）

卯月「恋ですかーあれ？私たちって恋愛禁止でしたっけ？」

未央「あーそういえば、聞いたことない」

李衣菜「プロデューサーさん、私達って恋愛禁止何ですかー？」

「P」禁止じゃないけど食事でもは先に報告してからにしてくれ、もしかすると業界の人だと相手方がダメなことがある」

李衣菜「……………そうか！私達アイドル一本じゃなくなつてタレント重視になつた場合、恋愛しても許される立場に持つていけるのでは？」

みく「なるほどにや、もし白馬の王子様が現れても『アイドル』の『タレント』ならばダメージは薄いと……………つてないにや」

未央「そもそも私たちつて他の部所のアイドルよりタレントの仕事の方が上手くいつてることない？」

卯月「そうですね、隣の部所は莉嘉ちゃんのお姉さんのいるグループ、『LiPPS』を筆頭になんというか、雰囲気違いますよね……………アイドルつて感じがします」

凜「……………私達もアイドルだよ……………」

まゆ「私達は職業アイドルですけど、あの方たちは象徴としての『アイドル』ですねえ、モデルのお仕事で御一緒にすると、やはりプロの技つて言うものがあります」

未央「いやいや、あなたもモデルでしょ」

まゆ「私は読モですから、ファッションモデルとは違いますよ……………何より真剣さが違いますね」

友紀「……………」

卯月「あ、友紀さんどうしたんですか？」

友紀「……私にはビール禁止されて飲酒出来ないようにこつちに送られてきたから聞いてただけけど、もしかしてみんな勘違いしてない？」

学生達「「え？」」

友紀「実はみんな結構稼いでるんだよ、みんなは感じてないかもしれないけどさー」  
未央「???」  
「そうですか？自分たちあんまり活躍出来るイメージないですけど、最近だと単独ライブも減ってますし」

友紀「アイドルって言っても色々あつてさー、例えば私みたいに野球のレポーターを仕事する時に野球選手の顔と名前を一致させるのって結構出来ないんだよねー、でも、それで見てる人はレポーターのファンじゃなくて野球選手のファンな訳だからさ、テレビを見ている人はもうカンカンさー！そんな時に名前がスラスラ出てくるレポーターなら違和感なく見れるわけさー！ただ、見ている人達は男の人な訳で綺麗な女の人がいると見てくれやすい、そこで私！ってわけよ！」

卯月「なるほど、見ている人は野球ファンだからアイドルのファンではなく野球ファンにとつて見やすい人なんですな！」

友紀「そうそう、私を知っている人で私個人へのファンは大体半分以下よ。でも、元々映像コンテンツとして成り立っているものに花を添えてるのが私達の部所なのよ」

幸子「まあ、カワイイボクが観光地を巡れば、そのままお金が貰えるぐらいですけどね！」

友紀「…………… まあ、現実の話『LiPPS』のある階にうちの部所があるとは忘れちゃだめなんだよ」

未央「あーもう、いい話だったのに一気にリアルな話にしないでくださいよー」

友紀「いやだつてさー、346の〇〇階だよ!?!事務所のお隣は『LiPPS』だよ!?!  
そして、ここはお店貸切だよ!?!相当稼いでるよ私達!」

友紀「だからみんな自信もって!ね!」

その後、学生卓で酒飲んだ友紀はメチャクチャ怒られた

## P 「最近気になることがある」

|| 新居 ||

ちひろ 「なんですかPさん」カタカタ

P 「まゆの髪の毛の頬のところのモフってなってる場所気にならない……？」

ちひろ 「…… 手が止まってますよPさん」（ニツコリ）カタカタ

P 「前に見せてもらった、ちひろさんの髪型のセットのしかたの謎は分かったんだけど…… まゆのアレも気になる……」カタカタ

ちひろ 「…… 私は…… 友紀さんの髪の毛の跳ねてるの気になりますね……」

P 「…… わかる…… ちひろも止まってるじゃないか、というか自宅でも仕事出来るからってやる必要なくねー？」ポイー

ちひろ 「まあまあ、ここでやるとけば職場ではアイドルの面倒見れますから…… でも今日はここまでにしましょう」カタツケー

P 「で、続きんですけど、まゆのあのモフってなるところ気になってね、最近ではもしかしてあそこには何かとてつもない秘密が隠されてるのでは？と感じてるのだよ」



ちひろ「まゆちゃんの髪型ですか？私できますよ」

P「え？」

ちひろ「一応業界の人の端くれですから、それなりにスタイリングの知識はありますよ、完全再現とはいきませんが、やり方ぐらいなら知ってますよ」

P「気になる……………」

ちひろ「ちよつと待っててくださいねー」

「事務員セット中」

ちひろ「できましたPさん！どうですか？」

P「おお！完成度たけえなおい！」

ちひろ「自信作です、ささ、どうぞ！」

P「じゃあ早速……………」モフツ

ちひろ「どうですか？」

P「……………」普通に髪だ……………」モフモフ

ちひろ「そりゃあ……………」髪ですから……………」モフモフ

P「……………」なんか思ってたのと違う……………」モフモフ

ちひろ「……………」そりゃあ……………」ただの髪ですから……………」モフモフ

P「あ、でも、なにか目覚めそう……………」よい」モフモフ

ちひろ「……そうですか……」モフモフ

P「……次は友紀の再現やってみるか……」モフモフ

ちひろ「……はい……」モフモフ

「事務員セット中」

ちひろ「できました」

P「今回はえらく時間かかった」

ちひろ「謎はねの正体を調べるべく色々試しました」

P「よし、とりあえず直そうとしてクシいれて見るぞ……えいつ」サラサラ

ちひろ「どうです？」サラサラ

P「すつげえwwwwww治んねえwwwwww」サラサラ

ちひろ「鏡持つてきてよかった……」サラサラ

P「なにこれwwwwwwこのハネwwwwww幸子にもこれあるけど直んねえwwwwwwふ

ひひひひwwwwww」サラサラ

ちひろ「あ、わたしもいいですか？」サラサラ

P「やってみろよこれwwwwwwはいwwwwww」

ちひろ「……」サラサラ

P「……」サラサラ

ちひろ「……………直んない……………え？……………怖っ……………」サラサラ

P「だろ？これ絶対呪いの類だよねwww」サラサラ

ちひろ「……………えっ、なにこれ怖いんだけど……………」サラサラ

P「wwwwwwww」サラサラ

ちひろ「シャワー浴びてきます」

P「行ってらっしゃい」

事務員セット中

ちひろ「おまたせしました」

P「ん？次はー、卯月か？」

ちひろ「はい、あのフワフワな髪を再現してみました」

P「よしこい！」(。°。▽。°。(。))

ちひろ「はい！」(っ\*^ω^)(っギュー

P「……………」(C)(>ω<\*(C)(ギュー

ちひろ「……………これ、なんです？」(っ・ω・)っ

P「……………」抱きついた時に背中であわわわわしてる髪に触ってみたかった」(。(。・、C)

ちひろ「……………」わかる……………」感想は？」(っ・ω・)っ

P「……………良い……………主に当たる胸が……………よい  
 !」C(〽〽〽\*)

ちひろ「……………そうですか……………島村さんにこれやったら、セ

クハラで通報したあとに離婚届出しますからね」(つ\*〽〽) つメキ

P「……………痛い痛い痛い!!!」メキピキバキ

ちひろ「ふう、ではお風呂で直してきます」

P「ごゆつくり」0 (:3 | ) くチーン

く事務員入浴中

ちひろ「戻りました」

P「さて、寝ますかね」

ちひろ「明日も早いですから」

P「じゃ風呂入ってくるわ」

ちひろ(今回一応凛さんの髪型何ですけど気が付きませんでしたね……………まあ、おろして髪の癖を失くしたただけなんですけどね……………)

〓風呂場〓

P「ふう、ヤバいなこれ……………くせになりそう……………というか日常的に可愛い子

に囲まれて性欲がヤバいからこれはヤバい……………(語彙力の低下)」ゴシゴシ

P「ちひろさんってコスプレ好きだったよな……………衣装担当の人にちひろサイ  
ズで全部作らせようか……………ポケットマネーで……………」ザー

P「いや……………担当たちに知られたくねえなあ」ザブーン

P「おいおいマイ サン コスプレちっぴー考えただけで起動状態になってんじやな  
いよまだまだ出番じゃないぜ」

PのP『いやいや、下半身には正直になった方がいいでっせ旦那ア』

P「そうだよなあ考える余地ないよなあ」

PのP『コスプレと髪のパ再現、あとは化粧使えば担当以外のアイドルと違ってやり放  
題さ!!』

P「いやあ、流石にそれは異状性癖やろ……………既婚者やぞ……………やっぱり

ちっぴーはあの髪型が一番だぞ……………」

PのP『流石の俺も気持ちかわかる』

P「……………」

PのP『……………』

P「……………」

PのP『……………』

P「……………まあ、衣装は買うか」

## PのP『せやな』

## 次の日

ちひろ「私、みなさんの他部所含めてだいたい衣装一通り持ってますよ」

この一言によりPは血の涙を流し、その悪魔的効力のあまりのちのP j r. 誕生に繋がったというのは別のお話

## 佐久間まゆ「私の妹分達が奥手すぎる」

〓事務所〓

まゆ（私は甘く見ていました……………事の発端は先週の事です）

P「まゆー、来週なー、うちに新入りが来るから教育係というか、面倒を見てもらいたいんだけどー」

まゆ「ええ、もちろん良いですよ」

P「ありがたいなー」

まゆ（この会話、私が読モをやっていた頃の感覚で二つ返事で返してしまいましたか……………）

輝子「フヒツ……………よろしく願います」

乃々「…よ……………よろしく願います……………けど……………」

まゆ（話す相手と目を合わせられない子達が本当にアイドルやれるのでしょうか……………？）

まゆ「では、自己紹介をしましょう、私からやりますね、私の名前は佐久間まゆ、読者モデルをやっていましたですが今はアイドルとして活動をしていて、本物のモデル業の方

もやらせてもらっています。もし分からないことがあつたら何でも聞いてくださいね」

乃々「……………本物の佐久間まゆさん……………ですか……………？」

まゆ「本物ですよ」

乃々「……………ううう、先輩の……………光が……………強すぎて……………とけそう……………」

輝子「フヒヒツ、次は私が……………私の名前は星輝子……………です……………好きなもの

はきのこです……………よろしく願います……………乃々も次やる……………」

乃々「……………森久保……………乃々……………です……………絵本が……………好き……………

です……………よろしく……………お、願います……………」

まゆ「よく出来ました、とりあえず机の下から出ませんか？向こうでお茶用意します

よ？」

輝子「フフツ……………キノコたちに日光は天敵……………あちらの日向には行けない」

乃々「……………広い空間とか……………むうーりー」

まゆ「この子達、どうやってここまで来たのでしょうか？」「では、お茶はここでやり

ましょう、紅茶でいいですか？いれてきますね」

乃々「……………ま、待つて下さい……………森久保も……………手伝います……………」

まゆ「はい、では、行きましょう」

輝子「フヒツ……………生きて帰れよ」



乃々「……もちろんですけど」

まゆ「この子達は何と戦っているのでしょうか」

「準備中」

乃々「……ただいま」

輝子「おかえり……また会えて嬉しいよ」ガシツ（握手）

乃々「森久保もです」ガシツ（握手）

まゆ「（この子達の結束力は何なんでしょう？）」

まゆ「では、お茶会をしましょう、お菓子は用意してありますよ」

輝子「フフツ……凄い……手作りクッキーだ……」サクサク

乃々「……女子力が……青天井……あ、おいしい」サクサク

まゆ「美味しかったですか、良かったです」

輝子「……乃々……気になるなら最初に聞いておいた方がいいよ……」

サクサク

乃々「えっ……流石に……むうーりいー……」

まゆ「気になることがあるなら聞いてもらって構いませんよ？」

乃々「うう……では……その……佐久間さんの……髪の毛……前に出

てる……所が……気になります……」

まゆ 「これですか？触ってみます？」

乃々 「…… いいんですか……？」

まゆ 「どうぞ」

乃々 「…… うう…… 失礼します」

乃々 「…… サワッ

乃々 「…… ツ」(。D。)ハッ

乃々 「…… しゅ、しゅごい…… です」モフモフ

まゆ 「仕事道具ですから、いつも良いものを使わせていただいています」

輝子 「…… 私もいいですか？」

まゆ 「いいですよー」

輝子 「では……」サワッ

輝子 「…… ツ」

輝子 「…… おんなじ人間の一部分だとは思えないほどのモフモフ感……」

まゆ 「ありがとうございます」

輝子 「…… 良い経験になりました……」

乃々 「…… 最近の悩みの種が一つなくなりました」

まゆ 「そうですね、それは良かったです」

数日後

まゆ「Pさんがお話しが苦手な人向けにコミュニケーションツールとしてゲームを持ってきてくれました」

輝子「……今更〇i i Uとスーパーマリオメーカーですか……フフツ」

乃々「でもこれ、1人用ゲーム内ですけど……」

まゆ「ステージを作って他のアイドルにプレイしてもらうことによって、言葉を使わずともコミュニケーションを取っていいこう、そして、ゲームを共通の話題としてお話をするきっかけを作ろうという事だそうです」

輝子「……やってもいいのか？」

まゆ「いいですよー」

輝子「……あ、もう既にステージが作ってある」

乃々「……みんな難しそうなステージばかりなんですけど……」

輝子「フヒヒツとりあえずこの『しぶりん』って人が作ったステージをやろう」

まゆ「凛さんのステージですね、洞窟内で氷ブロックを使って全体的に青く仕上がっています、ただ、このPスイッチの多さは異常ですね……」

乃々「あ、きのこ」

輝子「きのこ？きのこおおおおおおおおおお!!!」

乃々「おちた」

輝子「ノオオオオオオオオオオオオ」

まゆ「ウフフフフ」

↳1時間後↳

輝子「飽きた」

乃々「同じく」

まゆ「私も笑わせてもらいました」

乃々「まゆ……さん……あ、ありがとう……ごびいます」

輝子「今度他のアイドルにも話しかけようと思います……」

まゆ「頑張ってくださいね」

乃々輝子「はい」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

|| P 宅 ||

P 「つてことが俺の机の下であった」

ちひろ 「そうですね… それは良かったですね」 ゴゴゴゴゴ

P 「あああああああ、あれだ、Wi〇Uは自前のものを寄贈したただけだ、俺って優しい」♪ ( ε、 ; )

ちひろ 「そうですね… でも、私に黙って… 抜け駆けして… スイツ〇とイカ買つていい理由にはならないですよ」 ゴゴゴゴゴ

P 「おいしいマイハニー、イカがしたいなら言ってくれよ、カセット含めて2台買いだ！安心してくれ！」 ( ^ ω ^、 ; )

ちひろ 「あ、本当ですか」 \* . ° ( \* ■ ▽ ■ \* ) . ° . \* .

P 「も、もっちゃんさー、ネット注文で時間差が出てしまうけどな！先にハニーがやりたまえよ、H A H A H A H A H A !!」

ちひろ 「ありがとう、Pさん！」 (ニッコリ)

P (ちくしよーおおおおおおお、明日ヨド〇シ寄って買うぞー、さよなら俺のお小遣い!!)

## ちひろ「休日の過ごし方」

|| Pの家 ||

ちひろ「ゲームをします」

P「はい」

ちひろ「Pさん今日は？」

P「マ○オカートDDでございます」

ちひろ「Pさん、過去私とマリ○カートをやって何がありましたか？」

P「…………… スイツ○でやって、自分が圧勝し続けたためちひろさんが拗ね「拗ねて

ないです」…………… ちひろさんの新雪のような繊細な心を傷つけました」

ちひろ「はい…………… それでこれはどういうことですか？」

P「DDは2人協力プレイなので楽しめると考えております故、前回のように正座の上で何時間もゲームをしないでください、せめて胡座させてください」

ちひろ「よろしい…………… では、ソファの使用を許可する」

P「ありがたき幸せ」

ちひろ「くるしゅうないぞ」

P 「では早速」

ちひろ 「はい」

P 「……………」

ちひろ 「……………」

P 「なんで、自分に座るんですかね？」

ちひろ 「良いソファがあったので」

P 「隣に座れば良いのでは？」

ちひろ 「マリオたちも二人乗りですし自分たちも、こう、一体感を感じないといけな  
いじゃないですか」

P 「なるほど」

ちひろ 「始まりましたよ」

P 「では、グランプリで、自分が、運転します」

ちひろ 「なるほど、Zボタン同時押しで入れ替わるんですね」

P 「前回、ちひろさんの運転は絶望的ということが分かったのでアイテムをお願いし  
ます」

ちひろ 「はい」

く数分後く

P 「あああああ、お客様お客様お客様困りますあああああ」

ちひろ 「うるさい」(#、ω、)

P 「あれだな、あのマリオを狙おう」

ちひろ 「言われなくても分かってます」(、ー、ロー、)

P 「……………」

ちひろ 「あああもう、バナナ当たんないいいいい」し(、ロ、)ノムキー

P 「……………」

ちひろ 「緑甲羅しか引かないしー」ブノ。・D・)ノシ バンバン!!

P 「……………」

ちひろ 「喰らえ青甲羅!!」

P 「つしやーオラー位!!」

ちひろ 「やったー」(、。、?) (、>ω<\*)?

P 「……………」

ちひろ 「あああああ、P すいません大丈夫ですか?」

P 「……………」 大丈夫…………… ちよつと顎に当たっただけだから……………」

ちひろ 「一旦休みましょう」

P 「いやあ、想像以上にちひろさん、楽しんでましたね」



ちひろ「財務会計から庶務、Pさんのサポートまで全部やってますからね」コウチャ  
デス

P「ああ、あれだな、」サンキュー

ちひろP「人手が欲しい……………」

P「……………人回してもらおうか?……………」

ちひろ「……………はあ……………何か食べにいきませんか」

P「……………パンケーキとマシユマロのピザみたいな奴以外で……………」

ちひろ「では、パスタ食べましょう」

P「行く」

|| 東京某所 ||

未央「……………でさー! 弟がさー!!」

卯月「そうなんですかー」

凜「……………ねえ、あれちひろさんじゃない? めちやくちやお洒落してる」

未央「おっとー! してお相手は」

卯月「プロデューサーさんですね」

凜「あそこ、イタリアンのランチが有名なお店じゃん」

未央「あー星がいくつかってやつかー」

卯月「なんか、いい雰囲気ですなー」

凜「向かい側のスタバに入ろう」

未央「おっけー」

「窓際スタバカウンター」

卯月「少々気が引けますが、私も気になります」

凜「さて、プロデューサーさんとちひろさんは…… 2階だけに見える席に座ったわね」

未央「めっちゃくちやお洒落してたのはそれなりのドレスコードが必要だったからかもしれないね」

卯月「うふふ、なんだか探偵さんみたいですね」

凜「さて、多分、選び終わったのかな？」

まゆ「結構なお値段する、予約限定ランチメニューですよー」

NJ「二うわあ」

まゆ「まゆですよー」

凜「まゆさん、どうしてここに」

まゆ「Pさんいるところに私ありですよー」

凜「なるほど、それもそうよね」

未央「納得するんだ……」

卯月「あんな素敵なお店、プロデューサーさんのエスコートでしようか？」

凛「……違う、プロデューサーさんなら業界の人御用達の隠れ家的な所に行くだろうからね、多分ちひろさんの提案だと思うな」

まゆ「あと、多分ですけど、本気のエスコートなら私たちには絶対に見つからないお店を選ぶと思いますよ」

卯月「なるほどお」

未央「あ、ちひろさんが気がついた」ノシ

卯月「Pさんも気がついてますね」ノシ

凛「……あ、スマホ鳴ってる」

LI〇E

P：画像

P：やっべえぐらい、パスタうめえ、パスタうめえ

凛「偏差値高そうな格好で結構なお値段の料理食べてるのに偏差値低そうな食レポが来た」

卯月「あ、これ、ジェノベーゼソースのパスタですね、バジルの香りが口の中に広がって美味しいんですよ」

未央「ちひろさんのはカルボナーラかな？」

凜「…… お腹空いた……」

まゆ「…… さて、寮帰ってパスタ茹でましようかね」

凜「まゆさん……」

まゆ「来てもいいですよ、でも、その代わり輝子さんや乃々さんとお話してあげてください」

卯月「行きますよー」

未央「親に連絡してくる」

このあと寮でパスタパーティーが行われ

イチゴパスタという危険物質が作られたのであった

橘ありす「最近VRが流行ってます、VRやってみたいです  
す」

P「よく知ってるなありす」「橘です」橘、そうだな、最近だとVRユーチューバーなるものがアイドル目指してるだとか、JKだとか、エーアイだとか、イルカとか、ハムスターとか、色々やってるな……あとケモ耳だとか……把握しきれないけど……」

ありす「よくご存知でPさん」

P「それがどうした？」

ありす「あれ、私もやってみたいです」

P「どうしたんだ急に？」

ありす「私たちには3Dモデルあるじゃないですか」

P「スターライトステージのやつあるな」

ありす「あれ使えば大人な振る舞いの練習になると思うんですよ」

P「なるほど……一理ある、むしろ百理まである」

ありす「分かっていただけでしたか」

P「ちひろさん」

ちひろ「わかりましたー」

ありす in ありす「……………」

P「できたぞー！」

ありす「……………」

P「……………」

ありす「これ、私ですよね」

P「そうだな」

ありす「怒りますよ」

P「次行ってみよう」

ありす in 杏「……………」

P「これでどうだ？」

ありす「……………」

P「……………」

ありす「これ、杏さんですよね？」

P「そうだな」

ありす「怒りますよ？」

P「やる気顔の杏面白いなこれ」

ありす「あ、でもいい感じですね、こんな感じではかの人を自分が動かすの不思議です」

P「次行ってみよう」

ありす in りーな「……………」

P「……………」

ありす「……………」 ロック

P「……………」 ブフォツ

ありす「次行きましょう」

P「……………」 はい

ありす in しまむー「……………」

P「……………」

ありす「やつと、まともなのですね」

P「……………」 ガタガタガタ



ありす 「Pさん聞こえてます?」

P 「…… 終始真顔な卯月は辛い……」 ガタガタガタ

ありす 「次行きましょう」

ありす in しぶりん 「……………」

P 「……………」

ありす 「しつくりきますね」

P 「……………」

ありす 「ふーん、あんたが私のプロデューサー?」

P 「…………… プフフフ」

ありす 「次行きましょう」

ありす in みお「……………」

P「……………」

ありす「ぱつとしませんね」

P「……………」

ありす「あの、文香さんとか奏さんとか」

ありす「こう、大人な方いませんかね？」

P「わかった」

ありす in ユツキ「怒りますよ？」

P「すまん、わざとだ」

ありす in 文香「……………」

P「……………」

ありす「画面上にタブレット出せます？」

P「できるだけ、手を叩いてみる」

ありす「あ、出ました…… スクショ撮って貰っていいですか？」

P「ん??、まあ、いいぞー」

ありす「ありがとうございます」

カシャツ

ありす「ありがとうございます」

P「やはり、クールは様になるな」

ありす「なんか、大人って感じがします」

P「良かったな」

ありす 「次行きましょう」

ありす in フレデリカ 「……………」

P 「……………」

ありす 「真顔のフレデリカさんって……………」 怖いですね

P 「眼力が強いな」

ありす 「怖いんで次行きましょう」

ありす in 奏 「……………」

P 「……………」

ありす 「…………… たしかこう、この角度で…………… こう」 コクン

P 「…………… おおお、本物みたいだ」

ありす 「この間大人っぽく振る舞う秘訣を教えてくださいました」 ホクホク

P 「…………… 良かったな」

ありす 「次行きましょう」

—————

—————

—————

—————

—————

ありす in ちひろ 「…………… ちひろさんですね」

P 「ちよつと待てカメラ止めろ」

ちひろ 「どうしたんですかPさん」

P 「なんで、ちひろさんのデータある？」

ちひろ 「私の趣味で作っていただきました」

P 「え？3Dモデル作るのいくらかかると思ってたの？」

ちひろ「みんなが作る時に一緒に」(?>?・?・?) テヘペロ

P「え?経費から落としたの?」

ちひろ「Pさんの給料から引かせていただきました」

P「マジ?」

ちひろ「すみません、つい出来心で…」

P「あつ、はい」

あります「これ凄いです、大人になった感じがします」ピヨーンピヨーン

P「まあ、うーん、いいや、撮影終了」

数日後

あります「すみませんこれ見てください」

P「よう、あります「橘です」橘、この間のVR撮影の奴だな、可愛く撮れてるな」

あります「なんでこれが動画サイトに上がってるんですか?」

P「vチューバーやりたいのになって思ってます……」

ありす「まあ、私のワガママを仕事ということでお給金に入ってるみたいなんですそこは百本譲ってアリとします」

ありす「なんで、バーチャルが少ワイプで私本人がメインなんですか？」

P「それは……撮れ高が高かったから」

ありす「私渋谷さんにめちやくちや怒られたんですよ」

P「まあ、そうだろうな、俺は飛び膝食らったし、他部所のアイドルを後から許可取って使ったから引き換えとして今度コラボすることになったからよろしく」

ありす「え？これ続けるんですか？」

P「企画としてLIPPSの5人の3Dモデルに6人がランダムで入って誰かの代わりに入ってるありす」たちばな「橘ありすを見つけて企画だ」

ありす「わかりました、動きの研究をしてきます」スタタタ

P「挨拶しつかりなー」ノシ

ちひろ「Pさん、ちよつとお話が」

P「なんですか？」

ちひろ「正座」

P「いやいや、ソファある「正座」はい」

ちひろ「あれ、どういうことですか？」

P「可愛かったから」

ちひろ「私の、3Dモデルが跳ねてる動画が全世界にばらまかれたんですけど」

P「最後のかわいい人誰？つてコメントあつたな」

ちひろ「それでなんと橘さんは何と答えたんですか？」

P「『プロデューサーさんの奥様です。何時もお世話になっていきます』」

ちひろ「常務に私に取材やTV出演オファー来てるとか言われたんですよ！」

P「いや、流星に出してる暇ないし」

ちひろ「そうですよ！さっきから事務所のパソコンにメール着まくりですよ、対応

どうするんですか？」

P「それに関しては、本当に申し訳ないと思います」

ちひろ「コメントの精査と返信は？」

P「私が精査し、橘に投げ、最終確認を私がかかります」

ちひろ「現在の労働時間に乗せですよ？」

P「はい」

ちひろ「なんで、ブラックな職場に自らするんですかね？」

P「面白いと思った、やばいと思ったが好奇心を抑えきれなかった」



ちひろ「はあ、わかりました」

P「そろそろ仕事に戻りたいんですけど」

ちひろ「そもそも現在労働時間外なので仕事してなくても大丈夫です」

P「はい、ごもつともで」

ちひろ「これだと私外歩けませんよ」

P「はい、すいません」

ちひろ「ネットモラルをしつかり守りましょう」

P「はい」

ユーチューバー橘ありす『橘です、正直私の我儘からPさんと奥様を困らせてしまいました、9割ほどPさんが悪いので後日Pさん持ちで奥様とイタリアンをご一緒させていただきます。皆さんはネットモラルをしつかり守りましょう。次回はどうぶつタワーバトルの実況をやります。更新はアイドル業が忙しいので来週になると思いますが、では皆さんお楽しみに。』

## P 「やらかした」

|| 事務所 ||

P 「いやーヤバいっすね」

ちひろ 「あの…… いや、すっかり確認しなかった私も悪いですけど…… 本当に

私も悪いんですけど…… 流石に馬鹿すぎませんか？」

P 「いや、本当に担当が売れっ子ばかりでよかった…… お金的には大丈夫だ…… メ

チャクチャ忙しいけど」

ちひろ 「…… これどうするんですか?? 今はとりあえず私が続けて出来ますけども。

私がいけない間の経理する人探さない」と

P 「…… マジでヤバい」

友紀 「たっだいまー」

友紀 「あつれー? どうしたのプロデューサー?、まるでファールだと思つてホームベースに戻つたら審判にホームランって言われて走り始めたんだけどビデオ判定でファールにバツターみたいな顔してるよ」

P 「…… どっちかと言うと渾身のひと振りですぞホームランよ」

友紀「……………  
???

友紀「……………」

友紀「……………」

友紀「マジ?」

P「マジ」

友紀「うっわー、ええ?ちひろさん本当ですか?」

ちひろ「……………はい……………」

友紀「おめでたじゃん!!」

P「ちひろさんがお休みの間の経理を任せられる人を探してる」

友紀「なるほどね」

P「常務には伝えたから……………まあ、普通に喜ばれたけど……………ついでに結婚

したいって愚痴も聞いたけど……………」

P「……………お義父さんの挨拶、先に行つといてよかった……………報告したらめっちゃ喜

んでた……………怖かったけど」

ちひろ「お父さん強面ですから……………」

友紀「デキ婚は仕事柄ヤバイからね……………」

P「マジでよかった」

ちひろ「めでたい事なんですけどね……現実がPさんを追い詰めてます。主に仕事量の意味で」

P「事務所に着いてカレンダー見るまではメチャクチャ浮かれてた……」

友紀「経理できる人見つかりそうなの？」

P「元々予定してた事だから話は付けてあるんだけどまさか開幕ホームランが決まるとは思わなかった」

ちひろ「……開幕戦先頭打者初球ホームランですからね」

友紀「ま、まあ、なかなかできない人たちもいるんだから早く生まれてよかったじゃん!!」

P「それは、そうなんだけどね……嬉しい事なんだけどね……今から逆算すると、会計締切の忙しい時に産休入るんよ」

ちひろ「やってしまいましたね……私はその頃は実家に帰りますけど」

P「その間お前らの相手出来なそう」

凜「話は聞かせてもらったよ!」

まゆ「その間は私達がPさんの面倒をみて差し上げますわあ」

ちひろ「やっぱり帰りません。こっちの病院の方がいいですね。そうしましょう。そっちの方がPさんも安心するでしょう」

凜「無理しなくていいよちひろさんPさんは私たちがしつかりサポートするから」  
ω<sup>^</sup>（ニコニコ

まゆ「そうですわあちひろさん」  
ω<sup>^</sup>（ニコニコ

ちひろ「実家にいた方がPさんを思うと胃が痛くなそうです。残ります」

凜「ぐぬぬぬ」

まゆ「うふふふ」

P「本当にごめんなあ」

ちひろ「私的にはできるだけ早いうちに産んでおきたかったので良いのですけど……ね……」

P「頑張る……」

P「凜、まゆ、友紀…… お前らはこういう事が起きないように計画的にな……後先考えないと本当に地獄だぞ…… いや、その行為に及ぶこと自体が御法度な業界だからな…… 駄目とは言わん、だがな、相手と時期をしっかりと選べよ……」

ちひろ「さて、仕事仕事、終わらせないといけない書類まだまだありますよ」

P「うおおおおお、育児休暇取るためにがんばるぞおおおお」

凜「うちって、恋愛とか御法度じゃなかったんだ……」

まゆ「隣の事務所は御法度って書いてありますよね……壁掛けに」

友紀「そう言えば、私たちはアイドルタレントとして売っていくから育児タレント的なことも今後の結果次第でやらせるかもしれないって言ってた……」

まゆ「私たちってアイドルですよ？」

友紀「P曰く、うちにいる中でアイドルを理由に行き遅れって言われる人が出ないようにしてるんだって、早苗さんとか少しずつ手を回してるみたい……あと、育休産休の使用率とか上げないと企業的にまずいらしい」

凜「なるほど、私たちは今後、346プロの社員になることもあるのか」

まゆ「……友紀さんがそんな真面目な事を話すとは思いませんでした」

友紀「ちよつとそれ酷くなーい？私だって大人なんだから！」

## 昔話勇者仁奈の冒険

### 〓事務所〓

(外に積み上がる雪)(麻痺する交通網)(明日の絶望)

P 「という訳で、明日学校も休みだし。もうお前ら帰れんから泊まっていくように」  
凜 「お泊まりだね」

卯月 「なんか楽しいですね」

未央 「これぞまさに修学旅行!!」

P 「いやあ、すまんね、まさか取材を強行されるとはおもわなかった」

卯月 「記者の方は大丈夫なのでしょうか？」

凜 「歩きできたから大丈夫って言って帰ってったよ」

未央 「仕事熱心だねえ」

P 「泊まりの準備は出来てるんだよな」

NJ 「「もちろん」」

P 「俺は仮眠室で寝るから事務所のフリースペース使ってくれ」

卯月 「あー？他の人は？」

P 「ちひろさんと仁奈はもう仮眠室で寝てる、莉嘉は姉にパスした、仕事ない奴は今朝の時点で外に出るなって電話したから大丈夫…… KBYDはロケで出てるし……あとはお前らだけだから早く寝ろよ…… 忘れるところだったけど、シャワー10時までだから早く行つとけ…… おやすみー」

NJ 「「おやすみなさい」」

〓 仮眠室 〓

P 「…………… 寝る……………」

仁奈 「……………」

P 「……………」 ( ⊠ ⊠ ⊠ ) スヤア……

仁奈 「…………… すごいです、一瞬で寝やがりました」

ちひろ 「…………… 実はまだ8時にすらなつてないんですけどね……………」

仁奈 「……………」

ちひろ 「眠れませんか？」

仁奈 「…………… はい…………… でも、今日は一緒に寝る人がいるので嬉しいでござえます」

ちひろ 「眠れない仁奈ちゃんには、私が昔、入院した時に聞いた御伽噺をしましょう」

仁奈 「…………… 面白そうでござえます!!」

ちひろ 「では、目をつぶって思い浮かべてください」



仁奈「はい」

ちひろ「……この物語はある国の王様に勇者が呼び出された時から始まります」

|| ||

王様「君には魔王を討伐してもらおう」

勇者「わかったでござえます」

|| ||

仁奈「王様が完全に美城さんでござえます」

ちひろ「常務でいいですよ」

|| ||

常務「君一人では難しそうだから一人仲間を用意した存分に使いたたまえ」

勇者「はい」

魔法使い「おう、面倒臭いから取り敢えず仲間スカウトしに行くぞー」

|| ||

仁奈「魔法使いが完全にプロデューサーでいやがります」

ちひろ「そうですね」

|| ||

P「取り敢えずこのギルドで仲間を集めるぞ」

勇者「ううう、なんか緊張するでござえます」

P「じゃあ、俺がティンと来たやつスカウトしてくるわ」

勇者「やったー」

P「よし、連れてきたぞー」

剣士「ふーん、あなたが勇者？まあまあかな」

シスター「皆さんの元気のために頑張ります！」

盗賊「いいですなー、勇者の仲間！」

勇者「いっぱい人が来やりました！」

|| ||

仁奈「ニュージエネのお姉さん方でござえます」

ちひろ「そうですね、でも強そうでしょ？」

仁奈「強そうでござえます」

ちひろ「それから勇者たちは冒険へ出かけます」

|| ||

凜「ここが最初のダンジョンね」

卯月「モンスターが現れるんでしょうか？」

未央「何が来ても負けないよー」

勇者「あ！スライムが来やりました！」

凜「私に任せて!!はああああ!!」

凜はまだ見習い剣士ですが才能に恵まれており最初のダンジョンの敵では相手になりませんでした

勇者「すごいでござえます!!」

凜「ざつと、こんなものね」

卯月「すごいです!!」

未央「ふっふっふうん、流石だね！」

勇者「どんどん行くでござえます」

一行が進むとそこには小さな港町と広大な海が広がっていました

勇者「海です！」

P「疲れているだろうし港町で休もう、俺は魔王が住む大陸への海路の確保しよう」

勇者たち一行は港町へと入って行きます

P「宿も取れたし俺は交渉してくる、みんなは自由にしてくれ」

勇者は自由時間をもらいました

勇者「何しやがります?」

凜「私は武器屋に行きたいかな」

卯月「私は宿で手紙を書いています」

未央「私はふらつと街を回ろうかな?」

勇者「では行きませう!!」

||  
||

ちひろ「寝ましたか……」

ちひろ「私も寝ましょうか」

ちひろ「この話をしてくれた方は元気でしょうか?」

ちひろ「おやすみなさい仁奈ちゃん」

ちひろ 「親に挨拶ですか？」

〓事務所〓

P 「そりゃあ、やっておくべきだろう」

ちひろ 「はあ、その時間は」

P 「休みは有給消化もあるし、お互いに実家が比較的近いからよかった」

ちひろ 「まあ、車で行ける距離ですね」

P 「…… なんかすごく乗り気でない？」

ちひろ 「まあ、そうですね、」

P 「取り敢えずやらなきゃいけない事だから行ってみよー」

〓千川家〓

ちひろ父 「……………」  
「ゴゴゴゴゴゴ（顔に傷）（スキンヘッド）」

P 「は、はひ→、じ、自分が、せ、千川、ちひろさんと、お、お付き合いさせていた  
だいています。P、と、申します、はい」

ちひろ父「……………」ゴゴゴゴゴゴ

ちひろ「……………」(しつかりビシツと決めなさい)」

P「えー、「いや、いい、ちひろ、少し二人で話したい、子供たちの相手をしてきてもらえるかな？」ゴゴゴゴゴゴ……………」はい……………」

ちひろ弟「ねーちゃん遊ぼーぜー」

ちひろ妹「わたしとあそぶのー」

ちひろ「わかりましたー」タタタタタ

ちひろ父「……………」

P「……………」

ちひろ父「……………」

P「……………」あのー？」

ちひろ父「君、名前は？」

P「はい、Pです」

ちひろ父「学歴は？」

P「最終学歴は○○○大学○○○学部卒です」

ちひろ父「高校は？」

P「私立○○○高校です」

ちひろ父「中学は？」

P「私立○○高校附属中学校です」

ちひろ父「……………そうか、君がPくんか」

P「はい？」

ちひろ父「話には聞いているよ、君はちひろの様々な所で影響を与えている……………中学の時、高校の時、そして、彼女は知らないが大学の時、就職後も、そして結婚も、私に至らないばかりに私がやらないといけないことを君に押し付けてしまっているよ」

P「はあ？自分がそんなに何かやってましたか？」

ちひろ父「実はね、私は君に一度会ってるんだ、君は寝てたけどね」

P「え？」

ちひろ父「君、入院したことあるだろう」

P「あー、はい、大学時代に入院しました」

ちひろ父「その時ね、ちひろは同室だったんだ」

P「そうだったんですか」

ちひろ父「君、何か思い出せないかい？」

P「あ、あー、同室だった小学生に昔話しましたね」

ちひろ父「ちひろはね、それを聞いてたんだ」

P 「メチャクチャ恥ずかしいですね」

ちひろ父 「ちひろは君に気がついてなかったんだけど、その話を聞いて難易度の高い手術に挑戦する気になったんだ」

P 「そんな事が……」

ちひろ父 「私はその時君に一度会ってるんだ、ちひろはその時寝ていたがね……  
牛丼は美味しかったかい？」

P 「あー、あの時牛丼置いてたのおじさんだったんですか？」

ちひろ父 「もうお義父さんでいいよ、まあ、そうなるな」

P 「ありがとうございます。」

ちひろ父 「ちひろはいい人に出会えてよかった、本当に、本当に良かった」

P 「はい、必ず幸せにします……」

ちひろ父 「今日はゆっくりしてもらいたいところなんだが、この家はちひろにとつてはあまり良い思い出が無くてな、君もちひろも明日は仕事だろう、すぐに帰れたまえ」

P 「あー、はい、わかりました」

ちひろ 「……… 終わりましたか？」

P 「うん、今日はありがとうございます。」

ちひろ 「お父さん、幸せになります、行ってきます」



「いい笑顔でしたね……………」

ちひろ父「そうだな、これまで私があの子の父親として何も出来なかつたことを彼はやって来たんだ、印鑑ぐらいくれてやるさ」

「……さんには……………」

ちひろ父「伝えてあるだろうな…………… さて、夕食にしようか」

「…………… はい」

|| P宅 ||

P父「P坊が嫁連れてきおつた！かーちちゃん、赤飯炊いて！」

P母「本当に!!めでたいね！パパは親戚中に電話よ！」

メチャクチャもてなされた

# 神崎蘭子「こんなこと、許されるはずがないわ」

＝事務所＝

蘭子「……………」ゴニヨゴニヨ

飛鳥「初めて中の人が当てたSSRは限定SSRの私のはずなのになぜメインヒロインが私ではないのか？と言っているよ」

P「……………」いや直接喋れよ」

蘭子「……………」ゴニヨゴニヨ

飛鳥「昨日のライブで風邪気味なのはしやぎすぎて喉を枯らしてしまった。と言っているよ」

P「だからマスクとかしてるのか……………」いや、無理しないで帰ろうな？な？」

蘭子「……………」ゴニヨゴニヨ

飛鳥「私の体調は大丈夫、しかし私の出番が少ないのは気に食わない。Pの推しである友紀さんが美味しい役どころにいるのは百歩譲るとしてあまり興味のなかったニューージェエネの3人がほぼレギュラー化し、緑の悪魔とも言われるちひろさんがメインヒロインなのはおかしいそんなことは許されない、あと、メチャクチャクールでホット

なガール、プリティー飛鳥ちゃんがまだ出ていないのは由々しき事態である。と言っているよ」

P「あー、それなー、もう気がついてると思うけどなー」

蘭子「……………」

飛鳥「……………」

P「蘭子の口調把握しきれてないんよ」

蘭子「……………」

ばいね」

飛鳥「……………」

蘭子「……………」

飛鳥「大丈夫、蘭子には熊本弁（光（熊本弁））があるよ」

蘭子「……………」

P「あと、ダークイルミネイトってキャラクターが1枚目すぎてモブとして扱いきれ

ない」

蘭子「おかしい、こんなことは許されない……………」

飛鳥「までこらやめろ、蘭子がアイドルがしたらダメな顔してる」

P「話に登場するのはいいけど、言葉1つひとつ考えるうちに蘭子可愛いより激痛が

くるんだ」

ちひろ「そう言えばPさんも中学時代は飛ばしてましたね」

P「おいやめ」

早苗「腕挫十字固」

P「いだだだだだだだ」

早苗「私が抑えておくから今のうちに!!」

ちひろ「実はPさん中学時代に……」ゴニョゴニョ

P「やめ、やーめーろーよー、やーめ、やめろー、やめろー」

蘭子「……………?」

飛鳥「……………」カア／／／／／／／

蘭子「?どぎゃんこと?」

飛鳥「…………… き、ききき君という奴はなかなかやるじゃないか…… 学校の屋上で

「ヤメロオオオオオオオオ」なんて!!」

数分後

P「というか、なんでうちに来たの?」

飛鳥「常務からここに配属って言われた」

P 「お前らの配属隣だぞ」

飛鳥 「え？」

蘭子 「ふえ？」

P 「とても……とても言い難いけど……配属初日から遅刻は……」

なかなかやなつて」

蘭子 「なああああああああああああ」

ちひろ「抜き打ちPさんクイズ、優勝者には豪華景品が送られます」

|| 事務所 ||

凛「お疲れ様で……………」

ちひろ「遅いよ凛ちゃん……………座りなさい……………」

凛「……………なんで、事務所にクイズ番組のセットがあるの?」

ちひろ「……………座りなさい」( ^ ω ^ ) ニコニコ

凛「……………はい」

|| || || ||

ちひろ「はい、今回の参加者この3人」

凛「まあ、私の担当プロデューサーだからね、何でも知ってて当然よね」

まゆ「うふふふ」

P「あ、俺もやるの？豪華景品って何？」

ちひろ「豪華景品はPさんが昔数ヶ月分のアルバイト代で買った思い出のブランド物腕時計です」

P「いやいやいや、ちよつとまつ「第1問」デーデン

ちひろ「Pさんが初めてプロデュースしたアイドルは誰？皆さん一斉に記入どうぞ！」

P「負けれない戦いがある」

ちひろ「はい、皆さん回答が書き終わりました、答えは一斉にどうぞ」

凛《《加蓮》》

まゆ《《北条加蓮さん》》

P《《カレン》》

ちひろ「はい、正解は北条加蓮で全員正解です」

凛「まあ、このくらいなら加蓮から聞いたわ」

まゆ「知ってて当然ですわ」

P「体弱いのに目を離すとすぐファストフード食べるから、夕飯をちひろさんと俺の

交代で作ったのが良い思い出だ」

凜「まっつてその話聞いてない」

ちひろ「まだまだありますから後にしてください」

ちひろ「第2問」デーデン

ちひろ「Pさんが今1番推してるアイドルは誰？」

凜《渋谷凜》

まゆ《佐久間まゆ》

P《島村卯月》

ちひろ「では、正解VTRを見てみましょう」

|| P卓の朝食風景 ||

ちひろ「次つてどのアイドルが来ると思います？」オチャドウゾ

P「うーん、当分は765が引つ張つてくかなあ、346だとLIPPSが強さを感じる。」

ちひろ「そう言えば、Pさんの推しつて誰なんですか？」

P「あー、それ聞いてちゃう？聞いてちゃう？推しはねえ、765の我那覇響ちゃんかなー、スタイルもいいし歌も上手いし運動神経も良い、完璧だね。なんかの間違えでうちに来ないかなあ」



|| ||

ちひろ「はい、という訳で正解は我那覇響ちゃんでしたー、皆さん残ねーん」

凜「ちよつと待つてなんで、346のアイドルですらないの？というか、そこに書いてある島村卯月ってどういうこと説明してプロデューサー、向こうで見てる卯月が幸せな顔から苦虫を噛み潰しても笑わないといけないアイドル、幸子さんのような顔してるから」

まゆ「前の家出したらこの会話も聞けたはずなのに」グヌヌ

P「………… やばいね、このクイズのやばさが今わかった………… これはやばいね」

ちひろ「第3問」デーデン

ちひろ「Pさんがデレステで一番最初に出したかったSSRは誰？」

凜《姫川友紀》

まゆ《佐久間まゆ》

P《限定前川みく》

ちひろ「意外にも凜ちゃんは姫川友紀さんなんですな」

凜「友紀さんにはなにかと甘いからそうかなって」

まゆ「まゆはまゆですわあ」

ちひろ「Pさんこれは？」

P 「限定SSRのみく引こうとして限定蘭子が出たっていうね」

ちひろ 「みなさん出揃ったので答えを見て行きましょう、どうぞ」

答え《友人に騙されて排出されると思ってた千川ちひろSSR》

P 「え、ちよつとまって」

ちひろ 「はい、これについては言質とつてます。となりの部署のプロデューサーさんです」

隣P 「はい、隣の部署でLIPPとかのプロデューサーやってます隣Pです。」

ちひろ 「Pさんは私が排出されると勘違いされていたみたいですけども」

隣P 「始めた当初はちひろさんをアイドルと勘違いして、エイプリルフルネタと、自分の軽い嘘で信じ込みガチャを回してましたね。なので、最初に当てようとしたSSRはちひろさんのSSRです。」

ちひろ 「はい、隣Pさんありがとうございます」

凛 「流石にこれは当てられないわ」

まゆ 「えええ」ヒキ

P 「悪夢だ」

ちひろ 「第4問」デーデン

ちひろ 「Pさんの隠してあるDVDとはあるアイドルの物です。誰？」

P「ああああああああああああああああああああ」

凜「うるさい」

まゆ「これは、気になりますわあ」

ちひろ「皆さん、書き終わりましたかー？」

P「え？これやるの？」

ちひろ「では、みなさん一斉にどん」

凜《赤城みりあ》

まゆ《私以外ありえない》

P《佐久間まゆ》

ちひろ「おーっと、これは、凜ちゃんだけちがいますねえ」

凜「Pの反応を見る限り社会的にアウトなものなのかと思いました」（真顔）

まゆ「私が仕込みましたから、当然ですわあ」

P「……………」

ちひろ「Pさん顔色悪いですよー、取り敢えず正解VTR、どうぞ」

|| 寝室 ||

ちひろ「はい、ここが寝室ですね。ここには本棚があるんですけど」

ちひろ「ここには担当アイドルの参加作品のDVDや写真集以外にも346プロのア

アイドルの作品が収まっています。もちろん、Live DVDなんかもありますね。……これとかなかなかのレアものですよ、川島瑞樹さんがまだアナウンサー時代だった頃、テレビ局を舞台にしたので女優デビューしたものです。こっちはアイドルになる前の高垣楓さんの載ってる雑誌ですね。他にも、765プロのアイドルのライブDVDなどもあり、プロデュースの参考にしています。」

ちひろ「とまあ、ここまでは表の話、ここから隠しコレクションの方に踏み入れましょう」

ちひろ「まず、このダンスですね、このダンスの下一段は担当アイドル達が参加した作品の台本などが収められているんですけど」

ちひろ「これを全部出すと……… 見えました」

ちひろ「はい、Pさんの隠しコレクション……… と言いたいところですが、これはダメーです。ちなみにここには担当アイドルのグラビアDVDが主にあります。これも全部出すと……… はい、これがPさんが隠しているDVDですね、正解は巨乳アイドルの《及川雫》ちゃんでしたー」

||

ちひろ「Pさーん、間違えちゃいましたねー」

凜「やっぱりおっぱいかよちくせう」

まゆ「…………… 思ったより…………… ガチでしたわあ……………」ヒキ

P「……………」

ちひろ「Pさん、読めますー？タイトルー」

P「…………… おい乳、零100%……………」

ちひろ「えー？聞こえなーい？」

P「おい乳、零100%ですう!!」

ちひろ「まゆちゃんじゃなかったねえ!？」

P「そうですねえ!!」

ちひろ「担当アイドルでもなかったねえ!？」

P「そうですねえ!!」

ちひろ「凜ちゃん、この人おっぱい星人ですから!!」

凜「……………」ギリギリギリギリ

ちひろ「まゆちゃん、この人担当アイドルのグラビアDVDは夕食の時にわたしと一緒に  
見えるホームビデオ感覚の人だから!!」

まゆ「えええ」ヒキ

ちひろ「いや、子供や学生のはまだいいですよ!メチャクチャ手間がかかったロール  
キャベツ食べながら早苗さんのグラビアDVD再生された時の私の気持ちわかりま

すう?」

P「…………… すいませんでしたあ」

ちひろ「担当アイドルの皆さん気をつけてください。この人担当アイドルおかず（食用）にしますよー」

P「…………… すいませんでしたあ」

ちひろ「はい、話はそれましたが最終問題」デーデン

ちひろ「中学時代、私とPさんが通って学校は表向きには禁止されていましたがバレンタインチョコ送る風習はもちろんありました。Pさんはバレンタインの時になると無名のチョコレートを毎回数個ほど貰っていました」

P「……………」（死んだ目）

ちひろ「んっんー、はい。では、なぜそのチョコレートが毎回無名だったんでしょうか?全員回答をどうぞー」

凛《バレンタインチョコを名前ありで渡すのが恥ずかしかったから》

まゆ《実は学校の先生に固定ファンがいた》

P《》

ちひろ「はい、一人空白がいますが時間が無いので正解に行きます…………… 凛ちゃん  
とまゆちゃんの二人ともです!!」

凜まゆ 「「おおおおお」」

ちひろ 「凜ちゃんの答えはですね……

……私ですねえ!! 恥ずかしかったですねえ!」(「・ω・」)「バァン

凜 「ちひろさんが自爆テロしてる!!」

ちひろ 「まゆちゃんの答えは家庭科の〇〇先生です」

P 「あー、あのおばあちゃん先生…… まじかあ」

ちひろ 「病気で無くなった一人息子にそっくりで一つももらえないと寂しいだろうか  
らだそうです!!」

P 「…… 妙に出来が良いのがあったのは先生のだったのか……」

ちひろ 「結婚の報告は私が電話で行いましたので、子供が産まれたら見せに行きま  
しょう」

P 「…… はい……」

ちひろ 「では最後に正解数の方を見ていきましよう」

凜 2

まゆ 2

P 1

ちひろ「あっちゃー、一位の人が二人も出てしまいました…… という訳で最後はジャンケンで決めちゃいましょう」

ちひろ「最初は」

凧「ぐー」

まゆ「ジャンケン」

凧まゆ「「ぼんー」」

凧「ぐー」

まゆ「ぼー」

ちひろ「優勝はまゆちゃです!!!!」

ちひろ「まゆちゃんにはPさんのお古の時計が送られます」

まゆ「とても嬉しいです」

ちひろ「惜しくも負けてしまいました。凧ちゃんが、どうでしたか?」

凧「Pさんの新しい1面が見れました」

ちひろ「ありがとうございます。なお、Pさんは家族会議がありますので、家に帰ったあとダイニングルームに集合です」

ちひろ「では、また会いましょう、さよおーならあー」ノシ



P「誰だ!!休憩室にこたつ置いたやつ!!」

||事務所の休憩室||

P「他部署のアイドルが住み着いたじゃねえか!!」

志希「にやーっあつたかーい」

奏「ハリポタ全話借りてきたからマラソンしてきたわ」

フレデリカ「ほんとーにー? やったー、フレちゃん見るー」

周子「そう言えば私、最後の方見てないなー」

P「君たちの事務所隣だろ」

志希「いやー、うちの事務所だと休憩室寒いんだよー」

フレデリカ「そうだよー超絶美人が揃い踏みだよー、選びたい放題だよー」

周子「あつ、このみかん美味しいわ」

奏「……………ディスクセットと」

P「いやいや、向こうもこつちも適温だよ! 強いていうなら向こうの方が暖房ガンガン効かせてるよ!」

志希「そんな、ケチなこと言わないでー、仕事場の休憩室にトップアイドル4人が転

がり込んできてるんだよ」

フレデリカ「これはお金むしろお金もらって良いんだよーフツフーン」

周子「和菓子持ってきたからさ、ココは穩便に済ませようよ」

奏「……再生っ！」テテーテ・テテーテ・テテーテ

P「いや、俺も入りたいんだけど………和菓子は貰うけど」

志希「残ねーんこれ、4人までなんだよねー、宮本さん」

フレデリカ「普通、早いもの勝ちだよねーノ瀬さん」

周子「そういうわけだから他当たってよ」

奏「美嘉がモデル業が終わって帰ってくるまで暇なだけだから」グリフィン

ドオオオオオオオオール!!

P「好きにしろ」(#。D。)

|| 2時間後 ||

P「あの一、ちひろさーん、この資料」

かな子「お、お邪魔してまーす」

P「おーつとなんで、休憩室にまた他部所のアイドルがいるんだ？」

ちひろ「休憩室で休んでたらお土産を持ってきてくれました、頂いてました」

P「そう言えばキャンディアイランドで京都行ってたんだっけ？」



凜「もう埋まってる……」

卯月「みなさんこんにちはー」

奏「お邪魔してます」

周子「みかんうめー」

飛鳥「お邪魔しているよ」

みく「おつかれにやー」

|| 3時間後 ||

美嘉「あ！見つけた！あんた達！なにやってんの!!!これから収録でしょ!」

周子「げっ美嘉だ!」

奏「まずいわ、このままでオアシスから投げ出されてしまう」

志希「ソウダヨ、仕事イコーヨ」

フレデリカ「二人トモ仕事タノシイヨ」

周子「二人ともどうしたの?」

美嘉「走り回ってたらマストレに見つかり元気そうだからこつてり絞られたらしいわ」

美嘉「とーにーかーく!!行くよあんたら!プロデューサーに挨拶せずに直接こつち来たでしょ!メチャクチャ怒ってるよ!」

周子「やばい、これ、マジなやつだ行こう」

奏「そうね……置いておくから観てていいわ、ではっ」

飛鳥「嵐のような人達だね………だがそれがいい」

みく「ふはあ、寝てたにやー」

飛鳥「おはよう………みくちゃん」

|| 2時間後 ||

P「ふひい、休憩休憩っと」

友紀「zzzzzzzz」

楓「スヤア……」

心「zzzzzzzzzzzzzz」

菜々「あつ、Pさん、お疲れ様です、私お茶入れてきますね」

P「はい、ありがとうございます」

菜々「ちよつと待っててくださいいねー」

P「………」

P「………」

P「4番……センター……姫川……くん」(ウグイス)

P「4番……センター……姫川……くん」(セルフエコー)

友紀「私がいつちばーん」

友紀「スヤア…」

P「…………… どうするか…………… 取り敢えず楓さんと心さんは担当プロデューサーに

回収の連絡入れよう……………」

P「友紀は…………… 起きるとうるさいから後でいいや」

|| 2時間後 ||

P「あの一そろそろ閉めたいんですけどー」

ちひろ「待つて…………… あともう少しだけ待つて……………」グデエ

P「…………… そう言えば誰ですかこのこたつ持ち込んだの……………」

ちひろ「私ですよー」

P「そうですか……………」

ちひろ「はいい……………」

P「…………… そうですか……………」

ちひろ「はひい……………」

P「では、うちに持って帰ってうちで入りましょう」

ちひろ「でも、事務所でコタツに入る背徳感…………… よい……………」

P「はいちひろさん回収しまーす」



## 単発ホラー

## 三村かな子「346プロ内チョコレート禁止令」〔閲覧注意〕

|| 346プロ・エントランス ||

凜「は？」

未央「どうしたのー？しぶりん」

凜「この張り紙……」

ポスターへバレンタインチョコを事務所に持つてこないでください、毎年、クリスマス↓お正月↓バレンタインと高カロリーなものを食べる月が続きますスタイルを崩す人が増えます。そのため346プロ内でのバレンタインを禁止します

卯月「…… え？ダメなんですか？」

かな子「私帰ります、ありがとうございます」カラカラカラカラ

卯月「…… ものすごい荷物でしたね」

凜「あのスーツケースの中身全部チョコレートだったのかな？」



未央「あっちゃー、どうする？ファミレスかなんか行く？」

凜「一応プロデューサーに挨拶してから行くよ」

ちひろ「こんにちはー」

凜「ちひろさん：：Pr「ダメです」

ちひろ「チョコはダメですよ、持って帰ってくださいね」

未央「ええええ！そんなこと言ってちひろさんはPさんにあげるんでしょ？」

ちひろ「まあ、一応」

凜「なっ！それなら私のも!!」

ちひろ「ダメです」

凜「なんで!!」

ちひろ「Pさんは甘いものが苦手です。そのため大量にもらう義理チョコや社交辞令チョコ、協賛品やCM出演の記念品など甘いものの処理がアイドルや私に来ますよね？食べますよね？太りますよね？」

卯月「それは：：：」

ちひろ「私は1週間で（自主規制）キロ太りました、この年になると痩せるの大変なんですよ！」

未央「うわっ」

ちひろ「去年はアイドルにはあまり食べさせないように隠してましたがアイドルが持ち込んだチョコによりプロデューサー達が勤務中に鼻血を出したりカカオ中毒になったり虫歯になったり糖尿病になったり……まあ阿鼻叫喚だったわけですよ」

卯月「大変だったんですね」

ちひろ「なので今年のバレンタインは若い力に頼ります」

凜「それって？」

ちひろ「事務所へ向かいましたよ」

〓事務所〓

P「はいこれ食べてー」

みく「もう無理にやあ」

李衣菜「……………んぐ……………んっ……………は“き”そ“う”」

菜々「お、お茶持つてきますね？」

友紀「……………」（白目）

N J（（友紀さん白目むきながらバケツにチョコレート吐いてる……………））

ちひろ「活きのいいJK追加です」

みく「助かった」

李衣菜「……………んっ……………」



卯月「……………」コクリコクリ

未央「zzzzzzzz」

凜「ぷろでゆ……………」

凜「はっ！」

凜「ここは?!なんで椅子に縛られて！」

未央「……………」

卯月「……………」

凜「未央!卯月!起きて！」

未央「………… つ!なにこれ！」

卯月「縛られています!?!」

ちひろ「おはようございます、御三方」

凜「ちひろさん!助けて！」

ちひろ「すみません、逃げられては困るので縛らせていただきました」

未央「なんだってそんな！」



N J 「「あ つ」」

凜 「あ あ があ あ」 (口が塞がらないんだけど！)

P 「では卯月から」

卯月 「があ あああ」 (頑張ります！)

P 「はい深呼吸してねー、行くよー、はいどんどん入れマース」

卯月 「…………… !?んんん」 ジタバタジタバタ

P 「はい口動かせるよー」

卯月 「おみふ…………… フゴフゴ、みず…………… ゴフツ」

ちひろ 「はい、ココアデース」

卯月 「あひはほうほはひは…………… ゴボツ…………… ぼフツ」

P 「まだまだあるからなー、休む暇はないぞー」

未央 「あ あ あ!!」 (やめて！やめてよプロデューサー！このままだと卯月しんじや

うよ！)

卯月 「頑張ります頑張ります頑張ります頑張ります」

P 「よいしいけるなー、どんどん食えー」

ちひろ 「はい、ココアですよー」

卯月 「…………… 頑張ります……………」

P「追加だぞー」

ちひろ「カフェモカもありますよー」

卯月「……………がんば……………」

P「たんとくえー」

ちひろ「たんとこのめー」

卯月「……………」

P「どんどんくえー」

ちひろ「どんどんのめー」

卯月「……………」

P「おい、起きろー！おい！ちつ、もう無理か……………邪魔だからその辺に転がしとけ」

ちひろ「はい」

未央「……………つ……………！……………っんあ……………つ……………」

凜「……………!!!……………ガッガッガッ

P「次は未央だー」

未央「あ”あ”あ!!」

P「未央にはチョコレート風呂にすつか、別部屋に移動だ」

|| 346プロお風呂場 ||

未央「…… あ…… あ…… ああ」

P「ちひろさん、水槽に入れるの手伝ってー」

ちひろ「はい」

P「椅子から離すぞー」

未央「あ……」

P「よいしよ」

ちひろ「こらしよ」

P「拘束全部はずすぞー」

未央「たすけ「はい扉ロックしますー」て……」

P「洋服とか拘束具とか上から全部だせー、やらないと苦しいのは自分だぞー」

未央「死にたくない、死にたくない、死にたくない」

ちひろ「はいよく出来ました、蓋しますね」

P「あと少ししたらいい感じのホットココアが上のホースから流れてくるから飲め

よー、たくさん飲まないで溺れるからなー」

未央「…… あけて!!…… だして!!だしてよ!!!」 ドンドンドンドン

P「んじゃ、あとはちひろさんに任せます」



ちひろ「はい、任せました」

|| 事務所 ||

P「ただいまー」

凜「……………」

P「……………」

凜「……………」

P「話し相手欲しいな、口のロック外すか」

凜「……………」ね、ねえ…………プロデューサー…………す、水槽…………いいいくつもあつ

たよね……………しかも満杯のやつ……………なにが入ってるの？」

P「……………ああ、あれね、左のは城ヶ崎姉妹、真ん中のは友紀、右は紗枝」

凜「……………」

P「お、そろそろ始まるぞ」

凜「……………」ガダカタガダカタ

|| 346プロお風呂場 ||

ちひろ「いきますよー」

未央「……………」つ!!……………」(飲まなくちゃ!!)

未央「……………」んぐつ……………」ん!……………」んぐ……………」ゴクゴク

ちひろ「ホースは長いですからうまく使ってくださいねー」

未央「……………んっ……………ゴホッ……………オエツ」バシヤバシヤバシヤ

未央「……………んぐっ……………んぐふっ……………ぐっ」ゴクゴク

〓事務所〓

凜「…………… たすけてよ…………… みんなを助けてよ！プロデューサー!!」

P「はあ？何言ってるんだお前？」

〓346プロお風呂場〓

未央「…………… もう無理…………… オエ」バシヤバシヤバシヤ

ちひろ「湯加減はいかがですかー？」

未央「…………… んぐ、ん」バシヤア

ちひろ「湯加減はいかがですかー？」

未央「…………… じに”だぐな”い!!」

ちひろ「ぬるいですかー？」

未央「…………… だ ぞ げ で！」ドンドンドン

ちひろ「あつたかくしますねー」

未央「あつつ熱い熱い痛い痛い痛い痛い熱い…………… いやあああああああああ

あああああああ」

ちひろ「まだぬるいですかー、もっと温めますねー」

未央「……………」

ちひろ「Pさん、未央ちゃん元気無くなっちゃいましたー、どうします?」

|| 事務所 ||

凜「未央!! 未央!!」

P「うるせえ、ちひろさんの声が聞こえねえだろチョコでも食ってる!!」ゴスツ

凜「んんんん!!」

P「もしもしちひろさん?、帰ってきて良いですよー」

凜「…………… どうしたのよプロデューサーーこんなのプロデューサーじゃないよ!!」

P「は?、何言ってるんだお前?、俺はいつもこうだぞ?」

ちひろ「帰りましたよー」

P「おかえりー」

ちひろ「そう言えばPさん、幸子ちゃんがまだまだまだ食べれそうだったんでもってきましてよ」

幸子「…………… (遠い目)」

凜「もういいでしょ!!! もう充分でしょ!!!」ガツガツガツ

幸子「…………… んっ… オロロロロロロ」バシヤバシヤ

P 「おいおいおい事務所で吐くなよ……」

ちひろ 「あらあら、では吐いたぶん食べれますね」

幸子 「オロロロロロロロロロロロロロロロ…… オエツ……」

P 「汚れちまつたし風呂行くか？」

幸子 「いやだ！お風呂だけは嫌だ！吐いたもの全部飲みますから！」

P 「ちっ、こつちが終わるまでに綺麗にしとけよ」

ピロロロロロロ

P 「はい、346アイドルB課プロデューサーのPです」

隣P 「Aの隣Pです」

P 「どうしたん？」

隣P 「規制破ってチョコ持ち込んだバカ達の穴という穴にチョコレートぶち込んだら

動かなくなつた、どうすればいいかな？」

P 「風呂場で洗い流せば動くんじゃないかね？」

隣P 「わかつた、ありがとう」

P 「まあ、いいつてことよ……… よし、次に凛いくかー」

凛 「ひっ……」

ちひろ 「あ、PさんPさん、この子チョコ持ち込んでますよ」

P「……………そっかー、いけない子だなあ……………そうだねー……………」  
凜「……………いや……………いやあああああああああ……………」

〓凜宅〓

凜「はっ!!」

凜「……………夢?」

ハナコ「ワン!ワン!」

凜母「凜ー!今日はレッスンの日でしょー!」

凜「はーい、おきたよー」

凜「……………今日って何日だったけ?」

凜母「今日は2月14日、バレンタインよ、忙しいからご飯は自分で食べてねー」

凜「はーい」

凜「……………夢でよかったあ」

ハナコ「ワン!」

## リードプロデューサー編

## 設定固めるために書き起こして置いたもの

P 190

このSSの主人公 体格に恵まれている謎の存在

その謎はちひろさんですらあまり知らなかったりする

実は社会人になってから初めて会ったと思っていたちひろさんを口説くためにレス  
トランや料亭を取引先の人から教えてもらったりしていたが10数年前に口説けてい  
たという話

ようき

千川ちひろ 154 ひみつ 82 58 84

メインヒロイン

昔、親が離婚していて父親に引き取られるも新しい母親と上手くいかず、実家にはあ  
まり帰っていない

Pとは中学1年の時に同じクラスだったがその後職場で再開するまで話したことが  
なかった

さびしがりや

鎌田 P 186

オリキャラ 元運動部

霊感が強すぎる

現かけだしアイドルプロデューサー兼生きた御神体

がぼりや

秋月 167 51 85 60 90

オリキャラ メガネ

産休に入るちひろさんの代わりになるように配属された

優秀だが前の同僚と上手くいかず転属願いを出していた

まじめ

隣 P 192

108 130 95 80 85 102 600

隣の部所のプロデューサー

Pの同期で敏腕プロデューサー

隣にはLIPPSやダークイルミネイトなどが在籍している

いじっぱり

Pの担当アイドル

ニュージエネレーション

島村卯月 1 6 1 5 9 4 5 8 3 5 9 8 7

しりが大きい

コンプレックスを多く抱えておりよく鬱っぽくなる

ボケ担当

渋谷凪 1 5 1 6 5 4 4 8 0 5 6 8 1

主人公になることがある

スタイルは別に悪くないが貧乳に思われることに苛立ちを覚えている

本田未央 1 5 1 6 1 4 6 8 4 5 8 8 7

影が薄い

損な役回りが多かったりする

ツツコミ担当

KBYD

輿水幸子 1 4 1 4 2 3 7 7 4 5 2 7 5

カワイイ



小早川紗枝 15 148 42 78 56 80  
 京都美人

鬼畜和菓子など数多くの顔を持つ

友紀の野球観戦に付き合ってる

姫川友紀 20 161 44 80 57 80

野球とビール

ゲロイン

Pさんのスーツや車を何度もダメにしてる

大人と子供の間で悩んでる

アンダーザデスク

佐久間まゆ

モデル課から引き抜かれた

髪の毛がもふもふしてる

ヤンデレだったがPが結婚し吹っ切れた

後輩を可愛がるのが最近の楽しみ

星輝子

机の下にいる

まゆの後輩

森久保乃々

机の下にいる

まゆの後輩

アスタリスク

多田李衣菜

ロック

最近色っぽくなってきた

馬鹿っぽく見えるがスルースキルが高いだけで意外と普通

前川みく

割と主人公

よくPとも喧嘩する

ツッコミ

その他

安部菜々

17歳

いい大人

片桐早苗 28 152 47 92 58 84

Pさんの数少ないストツパーでツツコミ役

セクシーギルテイの一人

市原仁奈

純粹

口が悪い

可愛い

城ヶ崎莉嘉

才能がありずっと事務所を出ているので作中に出ることが少ない

姉のいる隣Pの担当になる

橘ありす

vtuberに興味を持ち、実際に始めた

どうぶつタワーバトルにはまってる

鎌田Pの担当アイドル

白坂小梅

幽霊が見える・・・らしい・・・ 鎌田Pが担当になってからはアノ子を見なくなった

らしい

堀裕子

サイキックアイドル

ボケ担当

セクシーギルテイの一人

道明寺歌鈴

ボケてるようで意外としたたか

両親が挨拶に来た鎌田Pの才能を見抜き鎌田Pに降神の術式を施し生きた御神体として歌鈴の危機を回避させている

及川雫 170 56 105 64 92

グラビア課から引き抜かれた

ミルクジャンキー

セクシーギルテイの一人

その他のアイドル

LIPPS

隣の部所にいる

よく遊びに来る

ダークイルミネイト

隣の部所にいる

よく遊びにくる

三村かな子

お菓子の差し入れをする人

北条加蓮

Pが初めてプロデュースしたアイドル

隣の部所にいる

Pの食生活改善により倒れることが少なくなった  
その期間を後にパワーレベリングと語った

P 「バレンタインに常務と人材補充の話をしたら仕事が振られた」

〓事務所〓

P 「昇進はしたんだけどね」

ちひろ 「そろそろ死んじゃうんじゃないですかね？」

P 「大丈夫……後任の人材育成頼まれただけだから」

ちひろ 「新人の育成はいいとして、なんで、その新人が担当するアイドルも預けられてるんですか？」

P 「ほら、フレッシュな新人にはフレッシュなアイドルの方がいいじゃない？」

ちひろ 「まあ、私の後任まで見つけていただったので文句はないですけど」

P 「ちなみに俺、アイドルB課が解体されアイドルタレント部門にランクアップし、そのリードプロデューサーになった」

ちひろ 「……それって今までと何が変わるんです？」

P 「ここだけの話、給料がコレからコレになった……」 (小声)

ちひろ 「本当ですか……？」 (小声)

P「…… 次の誕生日は期待して良いぜ……」（小声）

ちひろ「…………… やった！」（\*。>▽<）9

P「…… そして何よりも、人材確保の申請権が得られたため早速してみたら来た、新  
人さんどうぞー」

鎌田「新人の鎌田つす！プロデューサーです！よろしくお願いします！」

秋月「秋月です、経理職です。よろしくお願いします」

ちひろ「秋月さんに鎌田君ね、よろしくお願いします」

P「頑張つてこー」

P「で、鎌田くん君が担当するアイドルはね」

鎌田「はい！」

P「この子達だよ」

小梅「…………… 白坂…………… 小梅…………… です…………… ホラー映画が…………… 好きで  
す…………… よろしくお願ひします…………… ！」

裕子「堀裕子です！特技は超能力です！」

歌鈴「道明寺歌鈴でしゅ、よろしゅくおねがひします」

鎌田「はい！よろしくお願ひします！」

P「ははは、プロデューサーがアイドルより固くなつてどうするんだ」

鎌田「すいません、プロデューサーになったばかりなもので」

P「プロデューサーが緊張しているとアイドルも固くなるから、気を緩める練習をするようにね」

鎌田「はい！」

P「次に秋月さん」

秋月「はい」

P「ちひろさんから仕事の引き継ぎ………は大丈夫そうだね………取り敢えず環境に慣れてね」

秋月「わかりました」

P「では朝礼終わり！みんな仕事に移ってー」

「「はー」」

ちひろ「そう言えば、リードプロデューサーって何やるんですか？」

P「本当は部長ってことなんだけどプロデューズ業も続けたいって言ったら部長だと管理職として内勤ってことになるから外回りもできるリードプロデューサーってことになった………それでも事務所にいる時間は増えるだろうけどね」



ちひろ 「無理しないでくださいね」

P 「…………… 努力します……………」

ちひろ 「あと、今日はバレンタインじゃないですか」

P 「ああ、そうね、夕飯は予約してあるから6時には切り上げるぞ」

ちひろ 「そうなんですか!?!」

P 「ああ」

ちひろ 「あー……………」

P 「…………… お店に行く前に家に寄るか」

ちひろ 「…………… そうしましょう」

P 「平日は時間が取れないからねちひろの手料理は今度の土日かな」

ちひろ 「腕を奮っちゃいますよ」

P 「楽しみにしてるよ」

ちひろ 「お仕事がんばりましょう」

P 「おー!」

凜「え？プロデューサーが増える？」

P「ああ、自分の腕には余るからな、自分で直接プロデュースするアイドルを減らして行くことになるな」

凜「もしかして、私たちの担当から外れるの？」

P「いいや、芸能界デビューからプロデュースしているアイドルはもう少しづつ減っていくさ」

凜「Pさんが最初からプロデュースしてるのって」

P「アスタリスクと友紀とNJ、仁奈とありすかな、莉嘉もだけど姉のいる隣に移籍することになった」

凜「まゆさんは？」

P「多分あと二人ぐらい増えるだろうからそうしたら担当から外れるかな、多分10年後ぐらいには完全に内勤だろうね」

凜「そっか、寂しくなるね」

P「いや、多分事務所に来れば顔を合わせるようになるから顔を合わせる回数は増えるかな」

凜「なるほど」

友紀「プロデューサー!!内勤になるってことは、今よりたくさん飲みに行けるってこ

とだよね!!」

P「何言ってるんだ、妻帯者がアイドルと二人で飲みに行けるわけねーだろ」

友紀「そんなー」(・ω・)

P「今後プロデューサーが増えるからそいつと行け、あと事務所内での飲酒は禁止だからな」

友紀「え？」

P「そもそも禁止だったのを黙認してたんだ、今後のことも考えてアイドル姫川友紀には飲酒量の制限を言い渡す」

友紀「やだ！」

P「やれ」

友紀「やだ！」

P「……………」

友紀「……………」 辛いです…………… お酒のことが好きだから……………」

P「具体的な量をメールで送ったし皆にも認知してもらってるから、酒が飲みたくなったら大人を誘って飲むように、もし一人で飲んだり制限を超えたら禁酒期間を設けるからな」

友紀「……………」 はい……………」

凜 「346 ってお酒好きな人多いよね」

P 「昔はカフェスペースでお酒を出していたんだが飲み過ぎてアイドルに手を出したりアイドルが手を出したりした事件があったらしい」

凜 「それで今は禁酒になったと」

P 「そういうわけだな……こいつの場合しつかり見とかなないと簡単に破るからな」

友紀 「……………」

P 「まあ、飲酒量の制限はこれから増える仕事にも関係してるんだけどな」

友紀 「……………え……………？」

P 「まず、ビールのCMの仕事が来てる、野球のテレビ中継の時に流れるそうだ」

友紀 「ふむふむ」

P 「ほかに、世界の地ビールを飲みに行く企画も上がってる」

友紀 「なるほど、いーねえ！」

P 「若者のビール離れ、飲酒離れを解消することと正しい飲酒を啓蒙していく広告塔として指名しているらしいからな」

友紀 「……………はい？」

P 「これからは酒絡みの不祥事起こしたらお酒業界が敵になると思え」

友紀 「……………はい」

P「取り敢えず飲酒やアルコールに関する生理学の本を渡しておこう、これを読んでおけば科学的にお酒が美味しくなる方法もわかる」

友紀「なるほど」

P「そして、世界のビールについての歴史や文化についての本だ、ビール好きなお前なら知ってるかもしれないが知識を定着させるために読んでおけ」

友紀「あーこの本欲しかったけど妙に値段が高いから買わなかったやつだ！」

P「次に世界のビール市場に関するココ最近のニュース記事だ、ネット上のものを印刷しておいた、もしビール会社にロケに行く時は読んでおくように」

友紀「……………これ必要？」

P「……………日本ならわかると思うけど海外のビール工場へロケしに行く時にライバル会社のビールの名前出さない自信ある？」

友紀「……………必要だね」

P「これからは仕事に1日1回ネット上で食品系のビジネスニュースを見る時間を作るから……………そろそろレッスンだろ、渡したやつはまた預かっておくから行ってこい」

友紀「もうこんな時間!?トレーナーに怒られる!いつてきまーす」

凜「……………もしかして、これがアイドルタレントを目指すってやつ？」

P「……………よく気がついたな。まあ、そういうことだな」

凜「奈々さんや早苗さんも？」

P「ぶつちやけるとアイドルってのはスポーツと一緒に戦えるのは10代から20代までなんだ、30以降もまで最前線で生き残れるなんて奴はひと握りの人間だけだよ、それから先はタレントとして、元アイドルのタレントとして生き残れるように調整してのさ」

凜「……………私もいずれそうなるのかな？」

P「大した自信じゃないか、元アイドルタレントだって最前線で戦うアイドルなんだぜ」

凜「え？」

P「元アイドルがタレントとしてテレビに出続けるのもひと握りなんだよ。そして少なくともこの部所にいるアイドルは346プロが積極的にテレビに推してることさ。んで、隣Pが担当してるのは10年後20年後も歌って踊るアイドルとしてライブをメインに売り続けようって決めてるアイドル達」

凜「そうなんだ……………私達って優遇されてるんだね」

P「さてさて、お前もレツスンだろ？行ってこい」

凜「わかったよ…… それとき、プロデューサー、バレンタインチョコ食べる？」

P「ああ、凜は初めてか……… 俺宛のバレンタインチョコは名前書いて事務所の前に置いて箱に入れとけ、この事務所だと人付き合いつてことで義理チョコをかなり貰うことになることがあるから管理してるんだ」

凜「……… えらくあっさりしてるね………」

P「アイドルから本命チョコ貰ったらかなりの大事件だからな、こういう風にシステム化しておけば本命チョコ作ろうって気になりにくいってことだそうだ」

凜「……… なるほど、とても納得できる……… じゃ！レッスン行ってきます」

P「行ってらっしゃい」

幽霊「小梅ちゃん会いに行つた友達が全員帰らぬ霊となつた」

〓事務所〓

小梅「……………こ、この事務所……………あの子達……………いない……………」

鎌田P「……………あのー、つかぬ事を聞くつすけど、あの子つて？」

小梅「……………あの子はあの子だよ……………鎌田Pさんには見えないかもしれないすけど……………」

鎌田P「……………それつて……………もしかして……………」

小梅「……………うふふふふ……………それはね……………もちろん……………」

鎌田P「ひいひいひい」

小梅「……………鎌田P……………面白い……………」

P「よーつす、おはようさん」

鎌田P「おはようございます！Pさん！」

小梅「……………おはよう……………ございます……………」

ちひろ「おはようございます」



鎌田 P 「おはようございます！」

鎌田 P 「Pさん！ちよつといいですか？」

P 「はいはいどうぞ、来て早々悪いが少し出てくるわ」

ちひろ 「では、緑茶のお茶っ葉がきれてたので買ってきてください」

鎌田 P 「わかつたつす！」

P 「でなに？なんか困ったことでもあったか？」

鎌田 P 「小梅ちゃんとやっていける自信ないつす」

P 「そうか？意外といけてると思うけど」

鎌田 P 「自分、幽霊とか怖くてやってけないつすよー」

P 「大丈夫だ、大丈夫……おっと、話したらお前の担当アイドルがもうひとり来たぞ」

裕子 「うー、サイキックおはようございます！」

鎌田 P 「お、おはようございます」

P 「おはよう、今日も絶好調だな！」

裕子 「サイキック朝食を食べてきたので今日も元気です！」

鎌田P 「事務所の方にもう小梅ちゃん来てるよ」

裕子 「わかりました！行きまーす！」

鎌田P 「あの子も辛いっす」

P 「だろうね、見た感じそんな気がした」

鎌田P 「超能力なんて無いっすよ……」

P 「うちは所謂キワモノだったり扱いに困る人が流されてきたりするからね」

鎌田P 「……… どうプロデュースすればいいのか検討もつかないっす……… Pさん、ちよつと先きますね」

P 「……… ？、行つてらっしゃい。」（この階段しかねーけど、どうしたんだ？トイレか？）

鎌田P 「あ！おはよう！」

歌鈴 「鎌田Pさん！おはようございまっ ツルツ

鎌田P 「あぶない!!」 ガシッ

歌鈴「へぶしっ」

P「おー！危ないところだったね、階段では走っちゃダメだよ」

歌鈴「は、はい！わかりました！」

鎌田P「……ふひい」

P「ちよつと鎌田Pと自分を出てくるから歩いて事務所に行くように」

歌鈴「はい！では、さきにいつてましゅ」

P「…………… 鎌田Pくん…………… なんで、歌鈴が来るって分かったんだ？」

鎌田P「なんかそんな気がしたっす」

P「気がした」

鎌田P「気がした」

P「……………」

P「最近身の回りで変なこと起きてない？」

鎌田P「最近っすか？…………… そうっすねー、自分マンションに住んでるっすけど、

最近寝る時になると周りの部屋がうるさかったっすよね…………… うち角部屋な

んすけどね、四方八方から壁蹴られてるみたいな音がするっすよねー」

P「ふーん」

鎌田P「不思議つすよねー、5階の壁を蹴れるなんて、世の中不思議な人がいるもんつすねー」

P「ん」

鎌田P「それがつすねー、歌鈴ちゃんの家に行った時に迷惑行為禁止つて書かれたシールもらつたんすよ、それ玄関先に貼つたら効果抜群でそれ以降迷惑行為がなくなつたんすよー」

P「そっかー」

鎌田P「そのあと、お礼の品を持って行つたら、おかあさんにマツサージして頂きまして」

P「ふーん」

鎌田P「肩こりが治つたつすよー!!」

P「すつごーい」

鎌田P「なんか隣の部屋が騒がしかったんすけどね」

P「きつと、忙しかったんやろなー」

鎌田P「そうつすねー、帰りにお守りまでいただきまして、至れり尽くせりでしたつすー」

P「歌鈴ちゃんをしつかりとしたアイドルにしないとなー」イラッシャーセー

鎌田P「あの三人の中だと一番話安いつすからねー…………… あつ、お茶つ葉ありました」

P「他のアイドルもしつかりプロデュースしてくれよー…………… 俺が会計しとくわ」

鎌田P「はい、でなんですけど…………… なんか小梅ちゃんがですわ…………… 自分と一緒にいるととても悲しい表情をするつすよね、なんでですかね？」

P「うーん…………… わかんねえなあ…………… でもさ、小梅ちゃんつてファッションにかなり気を使つてるから、モデル系の仕事とか、あとホラー映画好きみたいだから映画系の仕事とか考えてみたら？」アリアトーゴザイアスター

鎌田P「なるほど！…………… ただグレてるだけかと思つたつす」マーオコシクラサイアセー

P「ま、まあ、あの年で金髪にピアス、パンクなファッションはそう見えるけどさ、良い子だから」

鎌田P「そうつすねー、でも自分、ホラー映画とか怖いつすよー、自分見れないつす」

P「これも仕事だ！今度小梅と一緒にホラー映画見ろ！休憩室に再生機器あるから、道ずれも用意しとくから！」

鎌田P「頑張るつすー！」

|| 事務所 ||

小梅 「……………」 ジーッ

裕子 「むむむむむむむ」 グググッ

歌鈴 「フンフンフーン♪」 ルンルン

凛 (何故だろう…………… 新人のはずなのに近寄り難いオーラがある……………)

白坂小梅 「……………  
ホラー映画上映会……………  
楽しみ……………」ニッコリ

〓事務所内休憩室〓

奏「なぜ私が呼ばれているのか…………… ホラー映画も見なくはないけども…………… あ、鎌

田Pさんこんにちは」

鎌田P「こんにちははつすー、自分怖いの苦手なんで叫んじゃうかもしれないつすけど、すいません」

奏「大丈夫よ、Pさんから聞いてるから…………… それよりこの子の方が大変なのでは？」

歌鈴「…………… …… みないいきこえないみないいきこえない」ガタガタガタガタ

鎌田P「か、歌鈴ちゃん！ゆ、幽霊なんて、いないつすよ！」

裕子「もしいても、私のサイキックパワーで倒してあげますよ！」

小梅「おはよう：みんなあ」ヌルリ

歌鈴「ひいひい」

小梅「取り敢えずスプラッタとホラー、どっちがいい？」

歌鈴「ひいひいひい」

奏「……………一応ほとんどのスプラッタって年齢制限あるでしょ……………」

小梅「……………大丈夫大丈夫、でも、ホラーメインにしようか」

鎌田P「タイトルは何なんすか？」

小梅「私たちもお仕事が来るかもしれないから日本のものにするよ……………タイトル

は『着信アリ』……………パニック表現のイメトレにしようね」ニッコリ

奏「あ、ガチなやつから行くのね、てつきり『コワすぎ』シリーズみたいなエンタメ

なものかと思ってたわ」

小梅「やっぱり有名所見ないとね……………いくよ……………」

裕子「ひいひいひいひい!!」

鎌田P「ひえええええ」

歌鈴「ふえええええええ」

奏「……………これ見ると一週間ぐらいケータイを使いたくなくなるわ



ね……………」

小梅「…………… 楽しかったでしょ……………？」

テーテーテーテー テーテーテーテー ♪

裕子「!?…………… つつつ!?」

歌鈴「…………… つ!?……………」キユウ

奏「!?…………… 誰!?…………… 怖すぎて歌鈴ちゃん気絶してるわよ……………」

小梅「…………… これは私知らない……………」

鎌田 P 「…………… あれ?…………… 自分のスマホ机の上なの

に…………… 自分……………？」

奏「ちよつと…………… 笑えない冗談はやめてよ」

テーテーテーテー テーテーテーテー ♪

鎌田 P 「ちよつと待つてください!自分なにも知りませんって……………!!」

裕子「さ、さいきつくばわいで何とかします!!ここ、ここですね!!!」

鎌田 P 「ちよ…………… まっ……………」

裕子「えいやー」バシンツ

ガラケー「テーテーテーテー テーテーテーテー ♪」

裕子「…………… ガラケー…………… ですね……………」

奏「…………… うっ…………… あっ」クラッ

鎌田P「危ないっす…………… 寝かしといてあげましょう」

ガラケー「テーテーテーテー テーテーテーテー ♪」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

小梅「…………… これダメな子なやつだ……………」

小梅「取り敢えず私が出て交渉してみるね……………」

裕子「何かただならぬ雰囲気…………… 私のサイキックセンスが告げている…………… これはデンジャーなやつだと……………」

裕子「い、いやいや、ここは私がサイキックパワーで何とかしてみましよう」

小梅「いえいえ、私が」

裕子「私が私が」

2人「……………」

2人「……………」クラッ

鎌田P「…………… アイドルに危険なことさせられないっす…………… 自分がでるっす」

2人「どうぞどうぞ」

小梅「…………… 鎌田Pさん…………… 優しい……………」

裕子「…………… くっ、私のサイキックパワーより強いサイキックパワーを持っている

るとは!? 流石鎌田Pさんです！」

鎌田 P 「……………」

小梅 「…………… すごいなあ…………… 憧れちゃうなあ」

裕子 「鎌田 P ならきつと大丈夫です」

鎌田 P 「やってやろうじゃねえかあ!!」バンツ

鎌田 P 「もしも s ボンツ いってえ」

小梅 「ガラケー爆発した!」

裕子 「これは…………… サイキック除霊……………」

鎌田 P 「二人とも大丈夫っすか?」

小梅 「…………… 跡形もなく消えてる……………」

裕子 「…………… まさか鎌田 P さんもエスパーだったとは……………」

鎌田 P 「元気そうなので大丈夫っすね…………… 今日取り敢えずここでお開きにす

るっす」

裕子 「そうですね、詳しい話は後日ききますね! あ私は歌鈴ちゃんを部屋まで連れて

いきます!! では!! 歌鈴ちゃん! 起きてください!!」

鎌田 P 「では、自分は隣 P さん呼んでくるっす」

小梅「……」 チョンチョン

鎌田P「なにつすか？」

小梅「もしかしたら裕子ちゃんをプロデュースするのに使えるかもしれない参考資料を持ってきたから見てみて……… どれも超能力が出てくる作品だから………」

鎌田P「リングにトリックにスペックですか……… 面白そうつすね、ありがとう小梅ちゃん」

小梅「……… 君はアノ子から避けられてるから大丈夫そうだね………」 ボソツ

鎌田P「なんか言っただつすか？」

小梅「……… 何でもないよ……… 早く隣Pさん呼んであげよう………」

鎌田P「そうつすねー、すぐ行つてくるつす」

鎌田P「小梅ちゃんは見た目がヤンキーっぽいつすけど中身は良い子つすねー」

P「デスクワークが増えたら前より忙しくなってる気がする」

|| 事務所 ||

P「裕子をユニット組ませたい？」

鎌田P「そうっす、企画書も作ってきたっす」

ちひろ「お茶入れましたよー」

P「ありがとう……で、ふーんセクシーギルティねえ、でメンバーは？」ズズズー

鎌田P「うちの堀裕子」

P「うんうん」

鎌田P「早苗さん」

P「……まあ、セクシーギルティって名前なら早苗さん1人でもできそうだから

なあ」ゴクゴク

鎌田P「グラビア課から及川雫ちゃんっす」

P「ブツフウ」

鎌田P「大丈夫っすか！」

P「……………ゲホツゲホツ……………お前マジか……………!？」

鎌田P「え?ダメつすか?」

P「いや、まあ、悪くは無い……………ただ……………部所とか違うし常務に掛け合ってみる、引き抜くかそれともユニットはユニットで部所同士の協力体制になるのか、含めて聞いてくる、だからこの企画書じやまだ説得力が足りないから、手直しをしてこい」

鎌田P「え?OKつすか?」

P「出来ると思う……………ただね……………もしかしたら早苗さんのアイドルとしては最後の仕事になるだろうし、企画書見る限りだとライブと言うよりテレビ受け考えられて良いとキャラ付けだと思うよ、上手くすれば5分番組や深夜番組の一コマに入るぐらいにはなるかもな」

鎌田P「やつぱりゴールデンは難しいつすかね?」

P「人気が出るでないじゃない、お色気系はBPOがうるさいからなんだよ、NJやKBYDはなるべく色気無しで売ってるからゴールデンタイムに出やすい……………衣装もそういうのでまとめてるし……………ああああ放送倫理がなんだよ……………見る側はいちいそんなの気にしねえつての」

鎌田P「そうつすかね?」

P「あとは、特撮撮ってる制作会社に企画を売り込むか……………映画なら映倫だしBP

〇より緩いからなー」

鎌田 P 「そうなんすねえ」

P 「このユニット、キャラ付けが上手いからショートドラマみたいなのはできそう…… ただなあ、正直グラビアアイドルの及川雫の人気におんぶに抱っこになるだろうなあ、それが出来るのが346の強みなんだけど」

鎌田 P 「どういことつすか？」

P 「数年前の戦隊ヒーローの右から2番目にいた俳優を覚えてるか？ つて話よ、確かに言えるのが一枚目役が雫、二枚目が適当なイケメン敵キャラ、三枚目が裕子、四枚目が早苗になるだろう」

鎌田 P 「????」

P 「…… わかってねえな、歌舞伎の世界の用語なんだけどさ、一枚目は物語の主人公、ここに及川雫！二枚目は優男、イケメン枠、適当なイケメン俳優やらイケメンアイドルが適役として登場するか一般人として出てきて主人公との恋愛に発展！、三枚目は道化役！ボケ担当でアイドルの仕事じゃねえけどここに堀裕子が来ちまう、四枚目は中堅まとめ役!!早苗さんがピツタリ!!」

鎌田 P 「なる…… ほっ。」

P 「新人アイドル売り込むにはいいかもなー事務所のゴリ押しって言われないように」

うまーく売り込むかー…………… 取り敢えず企画書完成させてこい、自分は配給会社の人に軽く話してみる」

鎌田P「ありがとうございます！頑張ります、では失礼するつす!!」ダダダダダダ

ちひろ「いつになくやる気ですね」(？ー？)

P「いつもと同じだろ？」

ちひろ「…………… バスト105をうちに引き抜くためじゃないんですか？」

P「…………… な、何を言うのかね、ラブリーマイエンジェルちひろたん」

ちひろ「本当ですか？映画もKカップの揺れを楽しむために動きの多い特撮選んでませんか？」

P「いやいやいや、キャラ付けにあったシナリオを考えたら特撮監督に頼むしかないと思っただけ……………」

ちひろ「…………… ふーん…………… そうですか…………… では、あとは任せますね」

P「え…………… ?」

友紀「…………… Pさん…………… 私って色気ないのかな……………」

P「そりゃあつたら困るだろ、というかセクシー路線自体アイドルにとっては最後の



切り札だし、可愛いつてチャホヤされてるうちがアイドルの花だぞ、歌って踊れるアイドルが路線変更してセクシー路線で売ったらアイドルとしてはそろそろ賞味期限切れ、グラビア→イメージ→AV転落のパターンが存在するし……途中引退もあるけど、お金とかの関係で辞められなくなって耐えられず首吊った子もいる……だからまだ大丈夫……そうならないための部所だし」

友紀「……うーん……なんか釈然としない……」

P「今回の仕事は早苗さんがアイドルとして売り出すのは最後の仕事になるかもしれないから本気でやらないとな……今後は元アイドルのタレントとして活動することになるだろうし」

友紀「え……？」

P「セクシー路線で売り込むのにグラドルの雫ちゃんなら問題ないけど、アイドルの早苗がセクシー路線の映画に出るのは大変だろうし、あの中で唯一成人してるからサービシオンは多めになるだろうし……いわゆるさっきのパターンのグラビアとイメージの間ぐらい……映画だと下手すりゃ胸ぐらい出せて言われてもおかしくない……そこまで行くとうちの事務所の管轄じゃなくなるから止めるけど」

友紀「……偉く詳しいね」

ちひろ「……それはですね……Pさんそういう子が好きになるんですよ」

友紀「……………え……………？」

P「ちよつ」

ちひろ「映画やドラマをよく見るPさんは作中で可愛い子を見つけると名前を覚えて、業界のコネ使つて出演作品を全部チェックし、引退作品まで全部見るんですよ……………そりゃグラビアからAVまで全部……………」

友紀「……………ええ……………」

P「反面教師てきなアレだから、そんなんじゃないから！」

ちひろ「昔可愛い子いましたねー、何ちやんでしたっけー？」

P「……………たしかユキちゃんでしたねえ」

友紀「……………ええ……………」

ちひろ「最初は特撮で1回だけ出てきただけでしたよねえ」

P「そうでしたねえ……………某最近あまりバイクに乗らなくなったバイク乗りヒーロー

番組でしたねえ」

ちひろ「その後どうなりましたらっけー？」

P「そうですねー、売れなくてですねー、邦画で濡れ場やり切った作品を最後に行方不明になりましたねえ、借金抱えてたらしいんですけどねえ、ほんまもんの行方不明でしたねえ、その後完済されてたらしいですねえ、不思議ですねえ」

ちひろ「どの業界も下手な失敗すると地獄見ますからね……」

友紀「……怖……」

P「346プロにだけは喧嘩を売るなよ……プロデューサーの俺に喧嘩売っても部所変えて何とかなるかもだけど、346に喧嘩売ったらこの業界では働けないと思え……」

友紀「……あれ?……そう言えばみくちゃんはセクシー、セクシー言ってるけど……」

P「あいつの場合は15っていう年齢がそれを可能にしている……李衣菜が18になつたら、セクシーのセの字も言えないように教育する……ユニットだからな、李衣菜にまでセクシーのイメージ付かれると困るし……」

友紀「プロデューサーって大変なんだね」

P「……ま、お前にも5年後ぐらいにキレッキレのグラビア1本ぐらいに撮ってもらって、アイドル引退↓タレント転身して数年に1本写真集出ぐらいに落ち着いてもらうけどな」

友紀「……えっ……マジ……?」

P「5年後、25になった時、アイドルとグラビアと女優とタレントと引退……まだ他にもあるけど……どれが良いよ」

友紀「タレント」

P「だつしよー、そりやタレントだよなあアイドル続けてたらスタイル維持のためにビール腹になりやすい体質だから禁酒だろうし、グラビアも同じくアウト、女優として食べていくほどのキャリア積んでないからアイドルとして活動してきた土壌も使えるタレントに落ち着くわけよ……だからな……お願いだから5年後引退した後に適当なタイミングで適当な雑誌に男とホテルに入る写真撮られてくれー……不倫じゃなけりやいい……取り敢えず相手が結婚しても問題ないやつ頼むよー、準備できたら言ってくれよ、情報流して写真撮らせるから」

友紀「……… なんか……… 大人つて汚いね………」

P「お前に吐かれててダメになったスーツと車の買い替え代とクリーニング代は稼いでもらうから」

友紀「……… はい……… 頑張ります………」

P「……… というわけで今日の座学のお酒はコレだ……… インドビールの国内品『青鬼』、めちやくちや苦いから一応インドカレーの缶詰も付けとくから明日感想をノートに書いて持つてくるように」

友紀「えー、これ苦くて嫌い」

P「香辛料効いた料理と食べるもんだから……… わかりやすくインド料理と一緒に」

食えば意外といけるんだ、騙されたと思って持って帰れ、これ資料な」

友紀「……うう……わかった……」

P「追加で酒とか買って帰るなよ」

友紀「はい……」

P「さて……そろそろ休憩……」

ちひろ「Pさん、次も来てますよ」

P「……はあ……次は誰」

みく「みくがセクシーキャット路線で売れなくなるってどういうことにや!!」

P「あー、もう……何い??セクシー路線で売りたいなら少しは色気を覚えろってんだ  
!同室の李衣菜を見習え!あいつ普通に年相応の色気を使いこなしてるぞ」

みく「にやああああああ、李衣菜ちゃんより色気が無いつてどういうことにやー!」

P「まず、そのにやあにやあ言うのを止める!イメクラじやねえんだよだほが!」

みく「にやにおお!!猫はみくのアイデンティティにや!ミクは自分を曲げないよ  
!!」

P「んで持つてもつとスタイル良くしろ!最近たるんでるんじやねえのか?ああ?」

みく「なんですつてえ!、これでも最近痩せたわ!」



P「……………それってアイドルとしての強みってこと？」

卯月「……………最近、新人さんも増えて私も先輩になったんですけど、新人の子達ってみんな個性的でダンスも上手くて……………私……………お尻が大きい以外何もなくなつて……………考えてたら……………なんか最近寝て次の日が来るのが怖くなっちゃって……………ないよお、なんもないよお……………」

P「……………じゃあさ……………お前が現役のうちに尻がでかいことの価値が下がる未来が来ると思うか？」

卯月「……………え……………？」

P「土偶とかでも分かるんだけどさ、胸とケツがでかいことの価値は太古の昔から常にあり続けるんだ、その価値観は変わってねえし、今後も変わんねえ。アイドルとして体は資本だ、そのものが価値なんだよ、だから寝不足にならないようにカフェインの摂りすぎには気をつけて。ホットミルク飲んで寝なさい」

卯月「……………はい……………」

P「……………そろそろ、昼……………」

秋月「Pさん、昨日の領収書ありますか？」

P 「あー、秋月さん、出来てるから持ってってー」

秋月 「ありがとうございます」

P 「はい、ありがとうございますー」

P 「……………そろそろ……………」

まゆ 「……………うふふふ…………… P きーん」

P 「おう、まゆ、どうした？」

まゆ 「最近輝子ちゃんと乃々ちゃんが私が居なくても外出できるようになったんですよー」

P 「まじか、赤飯炊かな」

まゆ 「……………そんなにですか……………？」

P 「よかったよかった、お前も馴染めてるようで」

まゆ 「……………最近新しい自分に会えたと思います……………後輩が出来てやりがいが生  
まれました……………」

P 「そうか……………やりがいがあったか……………」

まゆ 「最初は不安が多かったですけど、少しずつ打ち解けられたのが良かったで



す……」

P「よかったよかった、今後も見守りを頼むよ……アイドル業も順調だし……」

まゆ「はい……今日は報告に來ただけなので、失礼します……レッスン行ってきます……」

P「おう、行ってらっしゃい」

ちひろ「まゆちゃん、変わりましたね」

P「ああ、なんか。綺麗になったよ。着る服も変わったし。ファンレターにも最近笑顔が自然になったのがあったし、ファンレターへの返信も始めたらしい」

ちひろ「これまで見向きもしてませんか？」

P「……いや、これまでが異常だったからね？」

ちひろ「Pさん以外から貰ったものなんで必要ないって言ってましたし、最初は屋上で焼こうとしてましたからね」

P「あれは……俺が確認する前のやつ見ちゃっただけだから……」

ちひろ「……まだ、その手の人がいるんですね……」

P「仕方ねえよ、ファンだけが見てる訳でもないし、ファンが安全とも限らんし……」

企業の力で護ってやらんと……」

ちひろ「そうですね」

P「さて、そろそろ昼飯なんだけど」

ちひろ「忙しそうだったんで、さつき適当に買ってきましたよ」

P「サンキューマイラブリーエンジエウちひろたん」

ちひろ「ふっふっふっ、もつと褒めてもいいんですよ」

P「きゃー！すてきー！」

ちひろ「もつともつと！」

P「天使！女神！ちひろ様！」

ちひろ「ありがとー」

P「俺の嫁が担当アイドルより可愛くて困るなうつと」

ちひろ「うふふふふふ」

凛「あのさー、二人とも惚気けるのもいいけど回りみよ？」

P「おう、担当アイドルの渋谷凛略してシブリンどうした？」

凛「あ、ご飯食べながらで大丈夫だよ」

P「悪いな」

凛「アイドル業やってたらさ、学校行けなくなる日もあるわけじゃない？」

P「そうだな」モグモグ

凜「そしたらさ、勉強遅れちゃって」

P「把握した……教科はなんだ？」モグモグ

凜「………全部」

P「あ？何だって？」

凜「………全部」

P「聞こえねえはつきりいえ」

凜「全部だよ！」

P「前川ア!!!」テレフォン

みく『なにやああああ!!!』

P「今日のレッスン全キャンセルと漁港へのグルメロケ無しにするから一旦家に帰って勉強道具全教科分持って事務所こい!!事務所のシャワー使っていいし着替え用意しとくから全力でだ！」

みく『?!わかったにやああああ!!!じゃ!李衣菜ちゃんあとは任せたにや!いいまいまいくにやああああああ!!』

P「夕飯はハンバーグだああああああああ」

みく『うおおおおお!!はんばあああああああああああああつぐ

!!

P 「よし、凜、お前は休憩室で試験範囲のノートのコピー貰ってるだろうからその整理と教科書のチェックしてなさい」

凜 「…………… はい…………… いや、実は……………」

P 「なんだ……………」

未央 「私も……………」

P 「…………… まあ…………… ええよ…………… 卯月は大丈夫だろうか……………」

未央 「しまむーは頑張ってるから……………」

P 「毎回テスト前になるとこんな感じで勉強やってないやつが生まれるんだよなあ、隣Pも大変って言うってたぜ…………… 取り敢えず休憩室で待つてろ」

未央 「はーい」

P 「…………… 疲れた……………」

ちひろ 「コーヒーか紅茶どちらが良いですか？」

P 「砂糖なしミルクティーで」

ちひろ「はい」

P「……………ふう……………」

P「あれ……………年かな……………前より疲れてる……………」

## 及川雫 「グラビア課から転属しました」

|| P宅 ||

ちひろ 「Pさーんまだですかー？遅刻しちやいますよー」

P 「ちよつと待ってー」

ちひろ 「何やってるんですか？」

P 「いや、転属される子が来るからビシツと決めてから行こうかなって」

ちひろ 「……………もしかして及川雫ちゃんですか……………？」「？」「？」

P 「もちろん……………こんな感じでいいかなあ？」

ちひろ 「……………はあ……………見せてください……………私がやります」

P 「ありがたき幸せ」

ちひろ 「……………夕飯は高級フレンチでいいです……………先日Pさんが取引先

と行ったっていう」

P 「え？まって、給料日前なんだけど」

ちひろ 「高級フレンチ食べたい」

P 「給料日前なん……………」

ちひろ「フレンチ……」

P「……： 予約入れときます」

Ⅱ事務所Ⅱ

雫「こんにちはは！本日転属されました及川雫です。よろしく願います」

P「よろしく」キリッ

鎌田P「よろしく願います」キリッ

P「鎌田P君、概要について話したまえ」キリッ

鎌田P「おす！……： 今回転属していただいた理由は我らの部所に所属する、堀裕子、片桐早苗とユニットを組んでいただくためと今後はグラビア以外のテレビに露出する仕事が増えるだろうという未城常務のお考えからアイドルタレントを多くプロデュースする我々の部所に来ていただきました」キリッ

雫「はい！」

鎌田P「プロデュースを担当するのは私で今後はユニット名『セクシーギルティ』としてプロデュースさせていただきます」キリッ

雫「ほかのお二人は？」

鎌田P「そろそろ到着します」キリッ

早苗「おはようござ……え……何この空気……ちひろさんが黄緑色じゃなくて普通のスーツ着てる……」

P「早苗くんおはよう、そこにかけてまえ」キリッ

早苗「Pさん……気持ち悪いよ……」

鎌田P「……こちらが片桐早苗さんです」キリッ

雫「なるほど、よろしくお願いします」

早苗「貴方が及川雫ちゃんね、よろしくお願いします」

裕子「サイキックおは……」

P「おはよう」キリッ

鎌田P「おはようございます」キリッ

ちひろ「おはようございます」

裕子「ちひろさんが普通のスーツ着てる！」

鎌田P「こちらが堀裕子さんです」キリッ

雫「及川雫です、よろしくお願いします」



裕子「よろしくお願いします」

P「それでは会議室を……」

ちひろ「…… Pさん……」コシヨコシヨコシヨ

P「マジかよww」

早苗「あ、化けの皮が剥がれた」

P「……… ちよつち行つてくる」タツタツタツタツ

ちひろ「行つてらっしやーい」ノシ

早苗「……… 何かあつたの?」

ちひろ「奈々さんが自宅でぎっくり腰で動けなくなつたみたいです」

早苗「ひつ、怖つ、一人暮らしてぎっくり腰とかホラーだよ」

ちひろ「昨日、レッスンあとにマッサージ受けて帰ってしまったみたいで……」

早苗「うわっダメだよそれは」

ちひろ「Pさんが車で事務所まで連れてきて、明日の夜の収録に間に合うように治さないといけないので行きつけの接骨院に連れていくそうです」

雫「……… アイドルって大変なんですわね」

早苗「いや、雫ちゃんがあと10年ぐらいしたらこうなるかもしれない」

裕子「……… あれ?奈々さんって17歳なんじゃ?」

早苗「…………… 17歳でもぎっくり腰になるんだよ……………」

雫「怖いですねえ…………… ぎっくり腰にならない為に！カルシウムを取りましょう！  
及川牧場の牛乳を持ってきました！」

鎌田P「あ、飲みたいっす！」

早苗「こつちも戻った！」

雫「鎌田Pさん、どうぞどうぞ」

鎌田P「牛乳好きなんすよねー、いただきまーす」ゴクゴクゴク

雫「みなさんの分も冷蔵庫に入れておきますね」

鎌田P「Pさんが会議室取ってあるのでそちらに移動して今後のことを話すっす」

雫「営業の時に及川牧場のPRしても良いですか？」

鎌田P「Pさんに聞いてみないとわからないっすね」

雫「そうですかー」

ちひろ「…………… 1人になってしまった……………」

秋月「おはようござ…………… 先輩が黒い……………」

ちひろ「おはようございます」

秋月「…………… Pさんと喧嘩でもしたんですか？」

ちひろ「Pさんとは喧嘩してませんが今朝ものすごくイライラすることがありましたが、フレンチをご馳走していただけるそうなので今は機嫌が良いです」

秋月「…… Pさんって優しいですよね……」

ちひろ「理詰めしようとしても最終的には衝動で動いてしまう人ですよ」

秋月「そうなんですか？」

ちひろ「中学時代の衝動に任せて結婚の約束して10年以上経ったあとに衝動で結婚までしましたから……あと、子供まで……」

秋月「そう言えば私が来た理由がそうでしたね」

ちひろ「産休取りますけどすぐに復帰できるみたいなので、このままだと子育ては事務所でかなー」

秋月「Pさんって結構稼いでますよね……仕事辞めたりとか……」

ちひろ「…… Pさん見とかないと浮気とかしそうですね…… 秋月さん…… 気をつけてくださいいね…… あの人アイドルには手を出さないですけどアイドル以外には手を出す可能性がありますから」

秋月「…… そうですか？ 私より可愛いアイドルには見向きもしてないですけど……」

ちひろ「あの人、アイドルの子達はビジネスパーソンとして割り切って考えてますか

ら…… 雫ちゃんの秘蔵コレクションこれまでは娯楽として使ってましたけど転属決まってから全部見直して、角度、ライティング、ポージングとか全部書き出しましたから……」

秋月「…… Pさんって何者……？」

ちひろ「ただのこり性な人ですよ…… ちなみにここにその研究ノートがあります」

秋月「…… 上への報告って昨日終わりましたよね…… 今日の仕事って……」

ちひろ「…… Pさんが帰ってくか鎌田Pさんが戻るまでは暇ですね」

秋月「見ましょう」

ちひろ「ええ見ましょう」ペラッ

ちひろ「はい、ダンスの振り付けも書いてありますね」ペラッ

秋月「カメラワークの支持のための絵コンテまでありますよ」ペラッ

ちひろ「……」ペラッ

秋月「……」ペラッ

ちひろ「……」ペラッ

秋月「…… よく見てますね……」ペラッ

ちひろ「…… これとかレンズわざわざ買って試したんですよ……」

秋月「……………プロデューサーって映画監督でも目指してるんですか？」

ちひろ「……………最初の夢はスポーツ選手だったんですよ」ペラッ

秋月「そうなんですね……………」ペラッ

ちひろ「……………」ペラッ

秋月「……………結構際どいショットまで研究してますね……………」ペラッ

ちひろ「……………」アイドルは見えたらアウトですからね……………私も研究の

被写体やりましたよ……………」ペラッ

秋月「え？」

ちひろ「え？」

秋月「え？」

ちひろ「え？」

秋月「そのー、入籍したあとですよね？」

ちひろ「いや、全然、その時交際もしていませんでした」

秋月「……………貞操観念え……………」

ちひろ「そうですか？モデルさんとやっつてること変わりませんか？」

秋月「一応聞きますけど服着てますよね……………」？」

ちひろ「……………このページのこの写真私です」ペラッ

秋月「……………すっごい水着！どこに売ってるんですかこんなの!!」

ちひろ「……………密林に売ってました」

秋月「流石密林さん……………で、何でこんなことに?」

ちひろ「Pさんが、たまに担当がモデルの仕事をする時にカメラマンにどういう風にとってほしいか聞かれてしつかり応えようとか悩んでた時にお試しのモデルやりますよって言ったら楽しくなっちゃって」

秋月「……………」

ちひろ「最終的にはアイドルの衣装を実費で私サイズを追加で買うようになり素材とか強度とかのチェックしてますよ」

秋月「……………私もそれやるんですか……………」

ちひろ「いやあ、今はそんなことしませんよ、昔は経費も少なくて安くて丈夫な素材探すところからでしたし、業界について二人ともズブの素人でしたから、若かったですし学生のノリで頑張っちゃいました」

秋月「ですよねー」

ちひろ「雫ちゃんがうちに来たからグラビア増えるだろうし……………また研究かなー」

秋月「……………胸はどうするんですか?」

ちひろ「詰め物して体のラインがはつきりする服着て体のラインを見るんです

よ…… もちろんウエストとヒップ、身長も考えますけど…… これありすちゃんの写真撮影前のやつですね…… 少しロリータ入ってたんでもものすごく恥ずかしかったです」ペラッ

秋月「…… うわっ……」

ちひろ「…… きついですよね…… 胸はサラシ巻いてサイズ落として、身長ごまかせるように大きめの椅子用意して頑張ったんですよ……」

秋月「…… 今のこの部所の地位って先輩が文字通り一肌脱いだからなんです  
ね……」

ちひろ「…… そうなりますね…… 今日の夕飯の時はこれをネタにいびってあげ  
ましよう」ペラッ

秋月「…… 先輩のスタイルとても良い…… 私も頑張ろうかしら……  
イエット……」ムニッ

ちひろ「倒れない程度に頑張ってくださいね…… さて…… 昨日の資料の確認を  
ましよう」パタンッ

秋月「はい……」

このあとPはフレンチ予約を忘れそうになり、ちひろさんに怒られたのであった

P 「奈々さんのぎっくり腰の件で忘れてた本当に申し訳ない」



## 城ヶ崎美嘉「少し、お話を伺いたい」

〓事務所〓

P（さーで眼鏡モードの美嘉はしつこいぞー）

ちひろ「理想の身長ですか？」

美嘉「今度雑誌のインタビュで聞かれるらしいんですよ……今更ですけど……これ差し入れです」

P「どうもどうも……それにしてもそのネタ煎じ過ぎてはや水だろ……」

美嘉「そうなのよ！だから、いろんな人に話を聞きたいなって」

秋月「私も気になります」

ちひろ「……そう言えばプロデューサーさんたち、みなさん背が高いですね」

美嘉「ちなみに事前のリサーチによると15cmが人気みたいです」メモメモ

ちひろ「……秋月さんはどう思います？」

秋月「私の場合その基準だと182?ぐらいですかね……」

P「鎌田Pがそれより少し上ぐらい」

秋月「それぐらいですか……自分的には……身長差は5〜10cm上ぐらいです」

かね……」

美嘉「なるほどなるほど…… Pさんはどうですか？」メモメモ

P「…… 190の自分だと…… 175……？モデルかな……？」

ちひろ「私が並んで歩くと子供ですからね」

P「大体40cm差だからな」

美嘉「…… 街を歩く時とかどうしてます？」メモメモ

ちひろ「腕組みですかね…… 一方的にしがみついていますけど」

美嘉「歩く速さとかは？」メモメモ

ちひろ「ゆっくりですけど早いときはしがみつくどブレーキになってます」

P「肘を溝内に当たるようにするのがポイントだ」

美嘉「…… キスとかどうしてますか？」メモメモ

ちひろ「まず階段や段差を使います」

美嘉「よくある身長差シチュですね」メモメモ

P「なお、届かん模様」

美嘉「…… ほう、どうしてですか？」メモメモ

ちひろ「跳びます」

美嘉「…… え？」

ちひろ「しがみつきます」

美嘉「なるほど……」メモメモ

P「大体抱きあげてやることになるな」

秋月「…… 恥ずかしくないですか？」

ちひろ「もちろん、酔ってる時にしかやりませんよ」

美嘉「結婚式の時はフラットな場所だと思えますけどどうしましたか？」メモメモ

P「その時は普通に自分が上からでちひろさんが下からみたいな感じで意外と出来るもんだ、ヒールとかで頑張ったけど」

ちひろ「十数cmのヒールはなかなか怖いものですよ」

美嘉「ほうほう……では、身長差カップルで求められるシチュエーションに壁ドンがあるんですけどそれはどんな感じですか？」メモメモ

P「やった事ねえ…… 実際にやってみつか……」

ドンッ

ちひろ「……」

P 「……………」

美嘉 「どんな感じですかー？」メモメモ

P 「……………」

ちひろ 「……………」

のかもしれない」

秋月 「私ですか!?!……………」

ちひろ 「物は試しです、やってみましょう」

ドンッ

秋月 「……………」

P 「……………」

ちひろ 「これで、よくある構図になりましたね」

美嘉 「どんな感じですかー？」メモメモ

P 「……………」

い……………」

秋月 「……………」

上司兼上司の旦那さんに普通なにか言えます?!

美嘉「わかりましたー……戻っていいですよー」メモメモ

P「さてさて、他に気になることはあるかね？」

美嘉「あとはですね、身長差で困ったことと、よかった事ですかね？」メモメモ

ちひろ「うーん、無いですかねー」

P「……………まあ、学生でもないし仕事してると2人でゆつくりくりもできないからなー」

ちひろ「強いていうならPさんがよく食べるので食費が辛いですかねー」

P「多分この仕事で扱いになれてしまった感はある……そこら辺は加蓮に聞いた方がいい」

美嘉「なるほど、ご協力ありがとうございました」

|| 隣の事務所 ||

美嘉「つて感じなんだけどう？」

加蓮「……………最初はPさん歩くの早くて挨拶回りだけで私が倒れてたわ」

美嘉「え？それヤバくない？」

加蓮「マジマジ、私が体力ないのもそうだけどPさんがスタミナありすぎなのよ、少しは休ませてつて言い続けてなんとか普通になったわね」

美嘉「他には他には？」

加蓮「…… 少なくとも今にも折れそうなガリガリの人と違って安心感はあるわね、ライブ後と私を筆頭に倒れる子が出たりするんだけど2人ぐらい抱えて車に乗つてたわ」

美嘉「体格が良いとそういうのもあるのね」

加蓮「守ってくれるっていうより、倒れた時に寝床や病院まで連れてつてくれる安心感って大事よ…… そういうのも含めてうちのプロデューサーも体格いいじゃない？」

美嘉「隣Pさんって確かサッカーやってたんだっけ」

加蓮「そうそう、高校サッカーがなんとかかんとかで、大学で怪我して一般就活でここ入ったらしいよ」

美嘉「へー、初めて聞いた気がする」

加蓮「私は瑞樹さんから聞いた」

美嘉「え、言っちゃっていいの？」

加蓮「Pと隣Pの経歴の話は有名みたいよ…… 二人ともニュースになるくらいには活躍してたらしいし」

美嘉「え？…… え？…… え？」

加蓮「Pさんは元高校球児だよ、しかも甲子園出てるよ」

美嘉「すごくない？」

加蓮「その縁から友紀さんの野球系の仕事を取ってきてるみたい」

美嘉「…………… もしかしてPさんも怪我？」

加蓮「半分あってて半分違う」

美嘉「半分はなんなのさ」

加蓮「10数年前の甲子園の優勝校の勝利投手インタビューでね、勝つたのに泣きながら『優勝するよりも辞めていく仲間を止めることの方が難しかった』って語ってね、物議を醸したんだけど。その後既に肘がボロボロだったことが分かかって、『良い機会だから、もう二度と自分の仲間が夢を諦めないようにする力をつけたい』って言って野球を辞めて大学進学したらしい」

美嘉「…………… そんな過去があったんだ……………」

加蓮「…………… 噂によると社会人になってからも球団から声が掛かることがあつたらしいよ……………」

美嘉「うちのプロデューサーはどうして怪我したの？」

加蓮「高校サッカーで成績も良くてJリーグとかスカウトが来るレベルまで達してたんだけど、まだ行く時ではないって言って大学進んだはいいけど交通事故で脚やっちゃって終わり、その時は彼女とかいたらしいけど事故当時はかなり荒れてたらしくて逃げられちゃったみたい」

美嘉 「……………」

加蓮 「…………… 現実…………… 非常だよ……………」

美嘉 「……………」

加蓮 「……………」

美嘉 「待つて、隣P彼女いたの聞いてない」

加蓮 「やっぱ気になるよねえ」

美嘉 「え！イケメンだし、いないのが不思議だったんだけど」

加蓮 「その当時はファンクラブとかあつて、ファンレターとか貰つてたらしいよ」

美嘉 「まるで絵に書いたような話ね」

加蓮 「もしかしたら、プロデューサーじゃなくて同業者だったかもね」

隣P 「ただいまー」

美嘉 「あ！プロデューサー！おかえり☆」

加蓮 「おかえり」

美嘉 「隣Pさんに彼女がいたつて話聞いてないんだけど！」

隣P 「昔なー、いたよ」

加蓮 「今はどうなのよ」

隣P 「いねえよ、最近合コンにも行けてねえし、キャバにも行けてないし、ああああ



あああああどつかに可愛い子いねえかなあ」

美嘉「アイドル目の前にしてその発言は贅沢だよ」

隣P「は？」

加蓮「今度お小遣い貰えればお酒注ぐお店の真似事してあげようか？」

美嘉「いいね！隣Pさん慰労会で担当アイドルが隣Pが酔いつぶれるまで代わり替わりにお酒注ぎ続ける会」

隣P「いやちよつと違うだろ」

加蓮「実際私らつて異性としてどうよ？」

隣P「ビジュアルとしてはいいんだけどさ……………例えばここに一ノ瀬志希とフレデ

リカの新人の頃のライブの写真があるだろ？」

美嘉「あるねえ」

隣P「ファン達はこういうのを見て可愛い、綺麗、ガチ恋したつて言うのよ」

加蓮「ふむふむ」

隣P「俺はこの写真をみて吐いたことがある」

美嘉「……………あ、その話知ってる……………」

隣P「このライブの時あいつら順番待ちで飽きたからつて俺の目を盗んで外ほつつき歩いてたんだよ……………色々あつて、俺は走つて2人を探した記憶がフラッシュバックし

て初めてこの写真をもらった時トイレに駆け込んで吐いた……」

美嘉「たしか楓さんがその場を繋いだんでしょ…… 当時部長だった〇〇さんがライブに出資してた△△フーズのお偉いさんに謝り続けてたって」

隣P「その時まで新人だったし、探すのやめてついでに会社も辞めようかなとか考えながら探してた」

加蓮「突如始まった楓さんの純粹な『温泉行きたい』トークが伝説になったって」

隣P「なんとか一曲歌えて良かったよ…… 自分は裏で〇〇さんに怒鳴られてたけど」

美嘉「…… そうだ、雑誌のインタビューで聞かれる理想の身長についてまとめたから一応こんな感じで答えるでいいかな？」

隣P「オツケー見せてもらって…… なぜPを参考にしたし……」

美嘉「ジ○ニーズ系より高身長イケメン俳優だったりが出てきてるし、高身長への胸キュンアピールするのはありかなって」

隣P「まあ、最近は平均身長も伸びてきてるし高身長男性好きって言うのは売り込み方としていいね、ただ、この返答に使ったP立ちのことと好みのタイプとか聞かれたら自分の周りに背の高い人がいて憧れますけど、性格が良くないから優しくして高身長な人って言っとけ、余計な噂が立たれると困る」

美嘉「そうだよね……わかった。」

隣P「よし、これで今日の業務終了！……事務所閉めるから出てけー」

2人「はーい」

ちひろ 「休みですよ！」

|| P宅 ||

ちひろ 「まとまった休みをいただけましたね！」

P 「引き継ぎもある程度済んでるし、莉嘉は隣へ移動、ありすは346内での撮影、仁奈はレッスンだけだから鎌田Pに頼んだ、あとは自分で大丈夫だろ……多分………  
なんか胃が痛くなってきた……」

ちひろ 「Pさん！そんなことより、まとまった休みと言えば！」

P 「旅行！」

ちひろ 「旅行といえど？」

P 「リゾートでゆつくりバカンス！」

ちひろ 「ゆつくりバカンスと言えど！」

P 「孤島だ………!!!」

ちひろ 「ひやつほう……ワイハーですかー？沖繩ですかー？」

|| 初島 ||

ちひろ 「私が考えてたバカンスする孤島と違う……………」

P 「まとまった休日って言っても数日だから仕方ないね」

ちひろ 「あ、でもハンモックある！」

P 「温泉もあるよー」

ちひろ 「ハンモックに乗りながら松と梅とヤシの木が楽しめますね！」

P 「飲み物買ってきます」

ちひろ 「…………… 温かいコーヒーお願いします」

P 「…………… まだ寒いからね……………」

ちひろ 「…………… ふっふーん♪」

P 「買ってきたよ」

ちひろ 「ありがとうございます…………… 温まりますね……………」

P 「ああ」チュー

ちひろ 「氷入りのトロピカルジュースって……………」

P 「気分を味わうには必要でしょ」チュー

ちひろ 「…………… 寒くないですか？」

P 「試しに飲んでみればわかるさ」

ちひろ 「では遠慮なく」チュー

P 「……………」

ちひろ 「雰囲気より…………… 寒いですね」

P 「今めっちゃ寒い」ガタガタ

ちひろ 「馬鹿なんじゃないですか？」

P 「ちよつとこれ持ってて」

ちひろ 「はい」

P 「サングラスかけてー」

ちひろ 「はい？」

P 「ポーズ決めてー」

ちひろ 「これでいいかな？」 クイツ

P 「あ、いいねえ」 カシヤカシヤ

ちひろ 「ふっふーん」 ドヤツ

P 「いいいいいいよ、別アングル行くよー」 カシヤカシヤ

ちひろ 「ふーん」

P 「いい表情だよー」 カシヤカシヤ

ちひろ 「いーっ」

P 「よーし別のポーズジグしようかー」 カシヤカシヤ

ちひろ 「よっこいしょっと」

P 「いいねいいねー」 カシヤカシヤ

ちひろ 「はーい」

P 「お尻見せてほらほらー」 カシヤカシヤ

ちひろ 「……………」

P 「笑って笑ってー」 カシヤカシヤ

ちひろ「……………妊婦が冬服のコートを着込んでハンモックの上でグラビアポーズを撮影というのはどうなんですか？」

P「ちひろさんが産休中に仕事机に飾るから必要」

ちひろ「もう少ししまともな写真にしてください、あと寒いのでホテルに行きましょう」

P「はい」

※妊婦でなくともハンモックの上で動くのは危険です。実際にはやらないでください

|| ホテル ||

ちひろ「チェックイン済ませましたね」

P「風呂は温泉じゃないから、明日入りに行こうな」

ちひろ「なるほど！」

P「とりあえずお風呂入りますかね」

ちひろ「わーい」

P「大浴場もあるけど部屋風呂なー」

ちひろ「Pさん！部屋風呂の時点で大きいですよ！Pさん！」

P「そうだねえ」

ちひろ「眺めもいいですよ！」



P 「孤島のホテルの上の方で島が一望出来るの好き」

ちひろ 「魔王になった気分が味わえますね」

P 「明日の温泉は海が目の前だぞ」

ちひろ 「楽しみにしておきます」

〓 レストラン 〓

P 「海の幸を楽しもう」

ちひろ 「ほう、イタリアンですか、Pさんに奢らせて育てた私の舌を唸らせるほどの料理ですか？」

P 「都心で食べる料理はな、様々な理由で味が落ちてしまっている素材をプロの腕で美味しくなっているんだ。しかし、ここで食べる料理はどれも新鮮な素材を使っている。美味しいに決まっているじゃないか。それに…」

ちひろ 「語ってないで早く食べないと冷めちゃいますよ」

P 「食べるー」

ちひろ 「美味しいですねー」

P 「おいしー、やったー」 \ ( ^ o ^ ) /

ちひろ 「はい」

P 「明日は8：00に朝ごはんです、その後植物園に行きましょう」

ちひろ 「…………… お酒飲んでいいんですよ」

P 「流石に飲まんさ」

ちひろ 「そうですね」

P 「……………」 ソワソワ

ちひろ 「……………」 事務所が気になりますか？」

P 「ごめん…………… 電話してくる……………」

ちひろ 「ここでいいですよ」

P 「では失礼して……………」 プルルル

秋月 『はい、346プロアイドルタレント部です』

P 「もしもし、Pです」

秋月 『あ、こんばんわPさん』

P 「秋月さん、事務所のみんなは元気かい？」

秋月『元気ですよ、今はまゆちゃん、乃々ちゃん、輝子ちゃん、仁奈ちゃんがババ抜きして遊んでいます』

P「そうかい、良かった良かった」

秋月『他のアイドルたちも元気ですよ……友紀さんが隠れて居酒屋行こうとして見つかって、あります『橘です』橘さんにアルコール依存についてお話しされていたり、アスタリスクの2人は喧嘩しています』

P「よし、いつもの事務所だな、明日も頼むよ」

秋月『はい、ではPさんたちもごゆっくりお楽しみくださいね』

P「ああ、じゃ、おやすみー」

秋月『おやすみなさい』

P「みんないつもどおり元気みたいね」

ちひろ「そりゃあ、昨日の今日ですから」

P「そりゃそうか」

ちひろ「さて、寝ますかね……Pさんはどうしますか？」

P「俺はこれから鎌田Pから連絡があると思うから話つけてから寝るよ」

ちひろ「そうですか……それではおやすみなさいPさん」

P「ああ、おやすみ、ちひろ」

## P 「頭が痛い？」

|| 事務所 ||

P 「おはよう」

鎌田 P 「おかえりなさいっす、旅行どうでしたか？」

P 「良かったぞ、ちひろさんも喜んでくれたし」

秋月 「先輩は、今日からですか？」

P 「ああ、今日から産休で家にいる、母さんが面倒見に来てくれるから安心だ」

秋月 「先輩の分も頑張ります」

P 「ああ、頼むよ、お土産は机の上に置いてあるから自由に食べてくれ」

鎌田 P 「外回り行ってきます」

P 「はい行ってらっしゃい」

P 「……………ふー、さーて仕事やりますかー」

友紀 「……………P さーん……………めちやくちや調子悪いです」

P 「もしかして飲みすぎか？」

友紀「違うよ！アレだよアレの日だよ」

P「そうか、辛かったら休んでもいいぞ、レッスンだけだろ？」

友紀「いや、レッスンは受けるよ」

P「……………」メモメモ

友紀「何書いてるの？」

P「……………アイドル達の生理周期表」

友紀「ええ」ヒキ

P「仕事柄やらないと問題があるんだよ」

友紀「……………へえ」

P「可能な限り温泉ロケとか外さないといけないし」

友紀「なるほど」

P「特にKBYDは体当たりロケが多いからしつかりやらないと」

友紀「それにしても、アイドルのアレの日をチェックしてるって変態見たいだね」

P「お前なあ、基本自己申告だからな、ロケ行って撮影できないと困るしリスクは減らさない」と

李衣菜「Pさん、今月も生理になっから」

P「そうか、どうしたい？」

李衣菜 「今回ののは頭が痛いから帰って寝るよ」

P 「明日の収録は大丈夫か？」

李衣菜 「問題ないよ」

P 「そうか、ゆつくり休め」

李衣菜 「お先に……」

友紀 「ちよつと待って」

李衣菜 「なに？」

友紀 「え？これ毎回報告してるの？」

李衣菜 「もちろん」

友紀 「恥ずかしいとかないの？」

李衣菜 「ないね」

友紀 「そう」

李衣菜 「帰っていい？」

友紀 「はい、どうぞ」

李衣菜 「じゃ、お先に失礼します」

友紀 「……………」

P 「……………」

友紀「……………誰あの子」

P 「多田李衣菜だよ」

友紀「いつもよりなんだかロックじゃん」

P 「あいつ曰く正直に言った方がロックだし楽、らしい」

友紀「珍しくロックなこと言ってる」

P 「最初言われた時はコーヒー吹いた」

友紀「だろうね」

みく「あの一」

P 「どうした」

みく「りーなちゃん怖かったんだけど私何かやつちやいましたかね？なにか聞いてま  
せんか？」

P 「生理が辛いから帰るって今報告してきた」

みく「そうですか…ならいいんです」

P 「そうか」

みく「では、自分はレッスン行ってきます」

P 「行ってらっしゃい」

友紀「あれもそう？」

P 「あれはエンジンがかかってないだけだぞ」

友紀 「そっかー」

P 「音楽メインのアイドルやりたいうって言う割にはうちに残ったし、バラエティにも文句言わずに出るし……本当にマルチに活躍してるよ」

友紀 「私は歌ったりするの苦手だしなー、あー、ビール飲みたいー」

P 「ダメだぞー」

友紀 「なんで何もしていないのに辛いことがあるんだー」

P 「そりゃ生物が子供産めるから体休めて早く産めっていう警告だろ」

友紀 「子供とか……仕事柄無理だし……なんで子供産まないといけないんだろ？」

P 「……おまえなあ……ビジネスの話から子供を産むことの重要性について話してやろう」

友紀 「あいい………」

P 「アイドルビジネスの一つであるCDの売上って何で決まる？」

友紀 「………ファンの人数」

P 「ではファンはなんだ？」

友紀 「?????人?????」

P 「そうだな、今回の場合お前のCDで考えよう。このCDの売上は大体ファンの人



数に比例する」

友紀「1人で2枚も3枚も買う人がいるけど」

P「何十枚も買う人もいるし、それよかもっと買う人もいるが基本的にはファンの人数が多ければ多いほど売れるな」

友紀「そうだよね」

P「ではその人はどうすれば増える？」

友紀「……………生殖」

P「お前にしちや言葉選んだな、基本的に生殖に必要なのは2人の人間だ」

友紀「まあ、そうだよね」

P「そして、胎生である我々ホモ・サピエンスの女性はお腹の中で子供を育てなければならぬ」

友紀「……………そうだね」

P「大体十月十日かかるな」

友紀「ちひろさんもそうなんだよね」

P「そうだな、ただここで質問だ、この1回で消費者である人が増えるか？」

友紀「……………増えるでしょ？」

P「……………よし、ここからは生命倫理とか心とか人権とか全部無くして考えろ」

友紀「はい……」

P「……………リソースを2を使い捨てて1を作る」

友紀「損してるじゃん」

P「今起きたことがそれだ」

友紀「……………なるほど」

P「もう一度言うが生命倫理とか心とか人権とか全部捨てて考えろよ」

友紀「分かってるって」

P「人間まあ雑多に考えて男と女が半々だ」

友紀「そうだね」

P「んで、女性が子供を産める期間が決まってるし1人が一度に何人も産めるわけじゃねえ」

友紀「双子もそう簡単に産まれるわけじゃないからね」

P「その中で3人産んで育てなければ人口が増えない……………ここで外国人については考えないものとする」

友紀「でも実際3人で辛くない？」

P「そうだ、子供を3人の教育費と3人産むために休む配偶者をカバーするだけのお金を稼ぐことと育てることが男この考え方ですべきことだ」

友紀「……………」

P「つまりだ、投機的に考えて消費者に3人以上子供を産んでもらってその子供にもファンになってもらわんと最終的には潰えてしまうのがビジネスってもんなんだ」

友紀「難しいね」

P「ああ、だから今346は婚活サポート事業始めるらしいぞ……資料が配られた……………」

友紀「……………は？」

P「引退したアイドルがPRガールをするらしい……………子持ちならGoodらしい……………」ピラッ

友紀「……………へえ」

P「……………パフオーマンズ下がると容赦なくここ送られるっぽいぞこれ」ピラッ  
友紀「怖っ」

P「政略結婚じゃねえけどビジネス結婚ありえるぞこれ……………怖っ」ピラッ

友紀「そうなたらセクハラとパワハラとマタハラどれで訴えればいいかな？」

P「全部いけるぞこれ、誰だこの企画書出したヤツ」

友紀「でもさー、アイドルなのに子供産んでもその後のことまで考えてくれてるんだね」

P 「まあ、最後まで面倒を見なきな」

友紀 「結婚かー」

P 「俺ももつと稼がなきやなあ」

秋月 「……………なら話してないでしつかり働いてくれませんかね？」 ビキビキビキ

P 「ごめんなさい」

隣P 「撮影場所が取れなかった？」

|| 事務所 ||

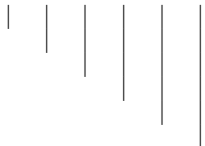
ディレクター以下D「まさかねえ、リトルリドルの撮影はここしかないって決まったんだけどねえ」

隣P 「あの公園って公共の場所ってお話ではじやありませんでしたっけ？」

D 「実はあの場所、ストリートバスケット好きなお社長の社長の私有地を解放してるらしくてねえ、ADが行ったんだけど許可が降りないんだよ」

隣P 「なるほど、次は自分も行ってみますね」

D 「いやあ、助かるよ、自分そういうの苦手だから」



|| 346カフェ ||

隣P「3on3やることになった」

鎌田P「いいっすね!!」

P「ああん？」

隣P「リトルリドルのPVの件でさ、撮影場所に使うなら来週土曜日のストバスの大会に参加してPRしてくれるならいいってことになった」

P「うちはアイドルプロダクションだろ？なんで俺たち？」

隣P「俺も気になって聞いたんだけどさ、俺の体見て『アイドルを出すだなんてもつたいたい』だってさ、アイドルはチアとしてってことになった」

P「なるほど？」

鎌田P「久しぶりに体動かせますね！」

P「そうだなあ、俺もやるかあ？」

隣P「じゃあ、今日から1週間仕事終わりに体育館取ってあるから、練習な」

鎌田P「はい!!」

P「まで！ウエイト!!何故そこまでやる必要があるんだ？俺は早めに帰らないといけないし、予定が…」

隣P「そういうと思っていたよ、常務からは『やるからには本気でやりたまえ、34

6の名に恥じぬような活躍を期待している』奥様からは『最近ベルトがきつくなつてませんか?』とのお言葉を頂いたぞ!!」

P「はい……」

隣P「バツシュと服は用意してあるから、がんばろー」

鎌田P「おー!!!」P「おー」

|| 346体育館 ||

渚「はい」

隣P「よろしくお願いします先生」

P「よろしくお願いします」

鎌田P「よろしくお願いします」

渚「まさか、別の部署のプロデューサーにバスケットを教えることになるとは…経験者は？」

鎌田P「はい!!」

渚「はい、鎌田Pさん、ポジションは？」

鎌田P「SFっす」

渚「便利屋ね、とりあえず昔の感覚を取り戻すために元気が有り余っているアイドル達とエンドレスlonelyね？」

鎌田 P 「はい!!………はい?」

茜 「さあさあ、鎌田 P さん!! やりましょー!!」 グイグイグイ

アイドル達 「………」 ゴゴゴゴゴ

鎌田 P 「え、まって、この人数相手にするの? 無理待って、あ、ああああああああ  
ああああ」

渚 「あとの 2 人はとりあえずドリブルしてみましょう」

2 人 「はい」 ガタガタガタガタ

渚 「まさかここまで出来るとは……」

隣 P 「○大のファンタジスタ舐めんなよ……」 ゼエゼエゼエ

P 「こちららモテるために体育のバスケも全力でやってたからな」 ハアハアハア  
渚 「あとは体力ね、とりあえず今の状態でフリースローラインから打ってみて」



隣P「バスケキッツ」

P「俺から行こう」

――

――

――

――

――

――

渚「二人とも本当に経験者じゃないの？」

隣P「シユートはゲームの花だぞ……レイアップとダンクってかっこいいじゃん？」

P「甲子園の精密機械舐めんなよ……」

渚「……とりあえず……せめて座ろう？」

隣P「ちよつとまって、腹筋に力が入らない」

P「あ……わかる……動かない」

渚「……体力さえ戻れば勝てそうね……明日からはひたすら走り込みね」

隣P「……なんか懐かしいな」

P「……………ああ、こんなふうに体育のあとの授業は寝てたな」

渚「しつかりストレッチしてから帰ってね、私は鎌田Pくん見てくるから」

隣P「ああ、そうするよ」

P「やるかー」

それから、プロデューサー達の地獄のトレーニングが始まった

渚「腰落として!!ドリブルはもっと小さく!!」

隣P「はい!!!」

渚「スリーは最初が肝心!!最初の一発が入るか入らないかで中の攻めやすさも変わるの!絶対に外さないで!!」

P「はい!!」

茜「まだまだいきますよー!!」

鎌田P「……………っ!!」(体を入れて……………スイッチ!!)ダムダム

茜「あ、抜かれました!!」

未央「次は私だよー!!」

鎌田P「ふう……………っ!!」(少しテンポを遅らせて……………加速!!)ダム…ダムダム  
渚「……………」

鎌田P「なっ!!」

渚「鎌田Pは目の前のことに集中しすぎです、ここからじゃゴール狙えませんよ」

茜「私達も」未央「いますよー」

鎌田P「しまった!!ゴールの真下で後ろを固められてしまった」

渚「今回は味方がいませんので最初から…」

鎌田P「なーんてね」シュツ

渚「そこからゴールは…ゴール裏からフックシュート!?!」

鎌田P「身長差あってこれぐらいできないとSFできないっすよ」

|||||



試合当日

|| ストリートバスケット会場 ||

渚「お前らの生きる意味は何だア!？」

3人「|| 殺せ! 殺せ! 殺せ! 殺せ! ||」

渚「お前らが今日来た目的は何だア!？」

3人「|| 殺せ! 殺せ! 殺せ! 殺せ! ||」

渚「貴様らは346プロを大切にしているか!? 愛しているか!？」

3人「|| ガンホー! ガンホー! ガンホー! ||」

渚「いくぞ!!!!」

3人「|| おおおお!!! ||」

続く